

# サーンバ伝説の和訳 (3)

## — 『バヴィシュヤ・プラーナ』 第1巻第139章 —

永井 悠斗

### 1. はじめに

本稿は、サンスクリット語で書かれた宗教文献『バヴィシュヤ・プラーナ (*Bhaviṣya-Purāna* : 以下 *BhaviṣyaP*)』において語られるサーンバ伝説<sup>1</sup>の和訳である。

ここに訳出した『バヴィシュヤ・プラーナ』の第I巻 (*Brāhma-parvan*) 第139章は、『サーンバ・プラーナ (*SāmbaP-Purāna* : 以下 *SāmbaP*)』の第26章と並行関係にある。この *SāmbaP* 26 は永井 2021a において既に和訳を发表済みであるが、それにも関わらず、並行関係にあるこの *BhaviṣyaP* 139 の和訳を行ったのは、ここには *SāmbaP* に対応箇所を持たない *BhaviṣyaP* に独自の語りが含まれるためである。

*BhaviṣyaP* 139 は、主人公であるクリシュナの息子サーンバと①ナーラダ仙との対話、②ウグラセーナ王の宮廷祭官ガウラムカとの対話、③太陽神との対話という三つの対話から構成される。この内、①と③は *SāmbaP* 26 に並行詩節を有し、②のみが *BhaviṣyaP* に独自の語りである<sup>2</sup>。図に示せば、両者の対応関係は以下のようにになっている。

<i>BhaviṣyaP</i> I, 139 の詩節	<i>SāmbaP</i> 26 の詩節 <sup>3</sup>	サーンバの会話の相手
1-6	16-22ab <sup>4</sup>	① ナーラダ仙
対応箇所なし	22cd-23	
7-8	24-25	
9-68	対応箇所なし	② ガウラムカ
69-94	26-53	③ 太陽神

<sup>1</sup> サーンバ伝説については永井 2020 を参照。なお、永井 2020 : 1 では「サーンバ伝説」という語を Stietencron 1966 において *Die Sāmba-Legende* (「サーンバ伝説」) として抜粋された *SāmbaP* の諸章を指すものと定義しているが、本稿の訳出範囲である *BhaviṣyaP* I, 139 について、Stietencron 1966 は *SāmbaP* と並行する詩節については *Die Sāmba-Legende* に含める一方、そうした並行箇所を持たない詩節については *Die Bhojaka* (「ボージャカ (に関するテキスト)」) として章を別にしてしている。*Die Bhojaka* は *SāmbaP* にほとんど並行箇所を持たない *BhaviṣyaP* に独自の章 (あるいは詩節) を集めたものだが、その内容がクリシュナの息子サーンバに関する物語である点は *Die Sāmba-Legende* に含まれる諸章と同じである。そこで、本稿はこれらの *BhaviṣyaP* の諸章も「サーンバ伝説」に含まれるものとして扱う。

<sup>2</sup> このサーンバとガウラムカの対話は、*SāmbaP* から①と③の詩節を *BhaviṣyaP* が借用した際に新たに挿入したものと考えられる。*SāmbaP* と *BhaviṣyaP* の関係については Hazra 1958 : 78-82 を参照。

<sup>3</sup> *SāmbaP* 26 の詩節番号は永井 2021a における数字を挙げた。刊本における *SāmbaP* 26 の詩節番号の不備および異同については永井 2021a : 65-66 を参照。

<sup>4</sup> *SāmbaP* 26, 1-14 は *BhaviṣyaP* I, 129, 1-16 に対応し、*SāmbaP* 26, 15 は *BhaviṣyaP* に対応箇所を持たない。*SāmbaP* と *BhaviṣyaP* の各章の対応関係については Hazra 1958 : 57-59 を参照。

注目されるのは、この BhaviṣyaP のみに見られるガウラムカとの対話において語られるマガ・ブラーフマナ<sup>5</sup>の出生である。それによれば、マガは太陽神とニクシュバー女神の間に生まれた「ジャラジャブダ」を祖とするとされる (BhaviṣyaPI, 139, 43) が、この人名については、複数の先行研究がゾロアスター教の開祖ザラスシュトラとの関連性を指摘している<sup>6</sup>。また、ガウラムカに言及されたマガが用いる二、三の道具の名称 (BhaviṣyaPI, 139, 59) は、それらがアヴェスター語の訛語であることを示唆している。そして、これらのゾロアスター教的要素の存在の故に、BhaviṣyaPI, 139 はとりわけ研究者らの興味を惹いてきた。

以上が、本稿が既訳の SāmbaP 26 と並行関係にある BhaviṣyaPI, 139 について、その和訳を取って試みた理由である。

### 1. 1. 利用した刊本について

訳出にあたって、テキストには以下の四つの刊本を利用した。

- ① Stietencron (Stietencron, Heinrich von. 1966. *Indische Sonnenpriester: Sāmba und die Śākadvīpīya-Brāhmaṇa: Eine textkritische und religionsgeschichtliche Studie zum indischen Sonnenkult*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.)

マガに関連した章のみではあるが、BhaviṣyaP の校訂テキストと呼び得る唯一のもの。しかし、テキスト決定にあたっては、写本が直接利用されているわけではなく、基本的には先行する諸刊本を校合したに留まる。また、そのテキスト決定の方針には問題がないとは言えない<sup>7</sup>。このため、彼の「校訂テキスト」は厳密な批判校訂版とは言い難く、Humbach 1978 の pseudo-critical という評価<sup>8</sup>も示す通り、利用には注意が必要である。

- ② Nag (Śarma, Rājendra-Nātha and Siṃha, Nāga-Śaraṇa, ed. 1984. *Śrībhaviṣyamahāpurāṇam*, Vol.1. Delhi: Nag Publishers.)

= VePr 1959 (Śrīkrṣṇadāsa, Kṣemarāja, ed. 1959 (3rd Ed.). *Bhaviṣyamahāpurāṇa*, Vol.1. Bombay: Venkateśvara Press.)

1984-1985 年に Nag Publishers から出版された、後述の Venkateśvara Press の BhaviṣyaP 刊本 (第3版) のリプリントで、解説とインデックスを加えたもの。このリプリントは第2版 (1993-1995年)、第3版 (2002-2003年)、第4版 (2012年) と版を重ねている。

オリジナルの VePr は第1版が 1896-1897 年に出版された後、初版に含まれる多くの誤りを訂正した第2版 (1910年)、そしてそれまでの長方形のルーブリーフ (Oblong

<sup>5</sup> サーンバ伝説に現れる太陽崇拜者で、インドに移住したイラン系宗教者を起源に持つ。マガの起源に関する先行研究における議論の概要は永井 2019 : 40-45 を参照。

<sup>6</sup> この人名には「ジャラジャブダ」という異読も報告されている。本稿注 90 および 91 を参照。

<sup>7</sup> Stietencron は SāmbaP と BhaviṣyaP に共通する詩節について、そのテキストを決定するにあたり BhaviṣyaP と SāmbaP を区別せず、またこの二つのブラーナ文献において異読が発生している場合には SāmbaP の読みを優先している。この理由を彼は BhaviṣyaP の刊本 (Venkateśvara Press 版) に比べて、SāmbaP の刊本は出版時の過度なテキスト修正を免れているからだとする (Stietencron 1966 : 15-16)。

<sup>8</sup> “A critical edition is greatly desired. V. Stietencron’s text is merely pseudo-critical. It is mainly based on the printed editions (SP : Bombay 1899; BhP : ib. 1897, <sup>2</sup>1959). Only one India Office Library manuscript of the SP. and the selections from an Oxford manuscript of the BhP. published by Aufrecht (1859) have been adduced by him.” (Humbach 1978 : 251)

Loose-Leaf) に替えて綴じ本の形態となった第3版 (1959年) が出版された。この VePr 1959 (とリプリントである Nag) が現在、容易に利用可能な BhaviṣyaP の刊本と言える。

③ VePr 1896 (Śrīkrṣṇadāsa, Kṣemarāja, ed. 1896 (1st Ed.). *Bhaviṣyamahāpurāṇa*, Vol.1. Bombay: Venkaṭeśvara Press.)

上記の Venkaṭeśvara 版の第1版。しかし、1959年の第3版とは異なる読みを伝える箇所も散見されることから、Stietencron 1966 では別個の刊本として扱われている。こうした第1版の異読の多くは出版時の誤記と判断されるが、一部は Aufrecht 1859 (後述) が伝える写本の読みと一致するものがあり、第3版における修正が全て妥当であったのかについては疑問もある。

また、第1版と第3版では詩節の区切りについても違いがある。BhaviṣyaP I, 139に限れば、第3版が全94詩節を数えるのに対して、第1版は全97詩節となっている。ただし、この違いは半句からなる詩節を独立したものとして数えるか、あるいは続く詩節の一部と見なすかどうか起因しており、テキストに含まれる詩節自体の増減ではない。

④ Aufrecht (Aufrecht, Theodor. 1859. *Catalogus Codicum Manuscriptorum Sanscritorum Postvedicorum; quotquot in Bibliotheca Bodleiana adservantur*. Part 1. Oxonii: E Typographeo Academico.)

本書は厳密には BhaviṣyaP の刊本ではなく、ボードリアン図書館所蔵のサンスクリット写本のカatalogである。しかし、その写本の一部が Aufrecht によってデーヴァナーガリー文字で転記されていることから、テキストの異読を検討する上で大きな価値を持つ。BhaviṣyaP I, 139 については Aufrecht 1859 : 32b-33 が BhaviṣyaP I, 139, 28-45b; 70c-81 のテキスト掲載している<sup>9</sup>。

上記の BhaviṣyaP の刊本 (②~④) は、②についてオリジナルの VePr 1959 が用いられている点を除けば、Stietencron 1966 によって利用された刊本と同じである。彼の略号との対応は以下の通り。② = Bh. / ③ = Bh. 1897 / ④ = AUFRECHT<sup>10</sup>

## 2. テキストおよび和訳

### 2. 1. 凡例

・底本は Stietencron 1966 所収のテキストとし、これに加えて Nag と VePr 1896、そして Aufrecht 1859 を参照した (これらの刊本に関する情報は前掲)。また、これらが異なる読みを採用している場合には、原則として底本の読みを本文の読みとして採用した。ただし、下記の場合には Stietencron 1966 ではなく Nag などの刊本の読みを優先することがある。

① SāmbaP と並行関係にある詩節について、Stietencron が SāmbaP の異読に基づ

<sup>9</sup> BhaviṣyaP の他の章の Aufrecht 1859 における対応頁は Humbach 1969 : 44 がまとめている。

<sup>10</sup> なお、Stietencron 1966 : 7 の書誌情報に見える本書の刊行年の 1895 という記述は誤り。ただし、本文中 (Stietencron 1966 : 14 など) では正しく 1859 年と記されている。

いてテキストを決定していると判断される場合<sup>11</sup>。

- ② Stietencron による異読の注記がないにも関わらず、実際には他の刊本との間に異同が存在しており、彼のテキストに誤記が疑われる場合。

また、いずれの場合であっても異読は全て注において示すよう努めた。

・和訳にあたっては上掲の Stietencron 1966 所収のドイツ語訳の他、Das 2014 および Nagar 2021 の英訳<sup>12</sup>も参照した。ただし、二つの英訳は学術的な翻訳とは言い難いため、積極的に利用することはしなかった。この他、先行研究には BhaviṣyaPI, 139 の一部を引いて翻訳を記したものがあり、これらも適宜参考にした<sup>13</sup>。

・テキストの詩節番号については Stietencron 1966 と Nag は一致しており、本稿もこれに従った。

・訳文中の [ ] は原文にはない訳者による補い、( ) は直前の語の補足あるいは言い換えである。

・訳文や注において用いた略号は以下の通り。

Aufrecht           Aufrecht, Theodor. 1859. *Catalogus Codicum Manuscriptorum Sanscriticorum Postvedicorum; quotquot in Bibliotheca Bodleiana adservantur*. Part I. Oxonii: E Typographeo Academico.

Av.                   Avestan (language)

BhaG                *Bhagavad-Gītā*

BhaviṣyaP        *Bhaviṣya-Purāṇa*

Böth                Böthlingk, Otto von and Roth, Rudolph, ed. 1879-1889. *Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung*. St. Petersburg: Buchdruckerei der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften.

em.                 emended.

MBh                *Mahābhārata* : Sukthankar, V. S., ed. 1942. *The Mahābhārata vol.4 Āraṇyakaparvan Pt.2.* ; Sukthankar, V. S. and Belvalkar, S. K., ed. 1947. *The Mahābhārata vol.7 Bhīṣmaparvan.* ; 1961. *The Mahābhārata vol.13 Śāntiparvan Pt.1.* ; 1966. *The Mahābhārata vol.17 Anuśāsanaparvan*, Poona: Bhandarkar Institute Press.

MDhŚ              *Mānava-Dharmaśāstra* : Olivelle, Patrick, ed. and trans. 2005. *Manu's Code of Law: A Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmaśāstra*. New York: Oxford University Press.

<sup>11</sup> 本稿注 7 も参照。

<sup>12</sup> Das 2014 は章の数え方が他と異なっており BhaviṣyaPI, 139 を Chapter 136 としている。

<sup>13</sup> Hodivala 1920 : 75-76; 81-85、足利 1953 : 93-96、Hazra 1958 : 78-82、Humbach 1978 : 245-250

MW	Monier-Williams, M., ed. 1899. <i>A Sanskrit-English Dictionary, etymologically and philologically arranged with special reference to cognate Indo-European languages</i> . Oxford: Clarendon Press.
Nag	Śarma, Rājendra-Nātha and Siṃha, Nāga-Śaraṇa, ed. 1984. <i>Śrībhaviṣya-mahāpurāṇam</i> , Vol.1. Delhi: Nag Publishers.
om.	omitted
SāmbaP	<i>Sāmba-Purāṇa</i> : Srivastava, V. C., ed. and trans. 2013. <i>Sāmba-Purāṇa: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation, Notes &amp; Index of Verses</i> . Delhi: Parimal Publications.
Rāma	<i>Rāmāyaṇa</i>
Stietencron	Stietencron, von Heinrich. 1966. <i>Indische Sonnenpriester: Sāmba und die Śākadvīpīya-Brāhmaṇa: Eine textkritische und religionsgeschichtliche Studie zum indischen Sonnenkult</i> . Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
YāDhŚ	<i>Yājñavalkya-Dharmaśāstra</i>
VePr 1896	Śrīkṛṣṇadāsa, Kṣemarāja, ed. 1896 (1st Ed.). <i>Bhaviṣyamahāpurāṇa</i> , Vol.1. Bombay: Veṅkaṭeśvara Press.
ViṣṇuP	<i>Viṣṇu-Purāṇa</i> : Pathak, M. M., ed. 1997. <i>The Critical Edition of the Viṣṇupurāṇam</i> , Vol.1. Vadodara: Oriental Institute.

## 2. 2. テキストおよび和訳

### BhaviṣyaP I, 139, 1-94

[あらすじ：前提となる物語の経緯は SāmbaP と共通している<sup>14</sup>。ただし、このサーンバの物語の語り手が、BhaviṣyaP においてはスマントウ仙 (Sumantu) であり、その聞き手がシャターニーカ王 (Śatānīka) という違いがある]

sāmba uvāca

tvatprasādān mayā prāptaṃ rūpam etat purātanam |  
 pratyakṣadarśanam cāpi bhāskarasya mahātmanah || 1 ||<sup>15</sup>  
 sarvam etat tu<sup>16</sup> samprāpya punaś cintākulaṃ manah |  
 devasya paricaryāyāḥ pālanam kaḥ kariṣyati || 2 ||  
 guṇayuktaṃ dvijaṃ kiṃcit samarthaṃ paripālāne<sup>17</sup> |  
 mamaivānugrahād<sup>18</sup> brahman vicinityākhyātum<sup>19</sup> arhasi || 3 ||

<sup>14</sup> SāmbaP のサーンバ伝説とそのあらすじについては永井 2020 および永井 2021a を参照。

<sup>15</sup> BhaviṣyaP I, 139, 1-8 は SāmbaP 26, 16-25 と並行関係にある (ただし SāmbaP 26, 22cd-23 を除く)。なお、今回の和訳にあたっては永井 2021a における SāmbaP 26 の和訳から一部訳語を改めた。

<sup>16</sup> etat tu ] Nag, VePr 1896; etac ca: Stietencron

<sup>17</sup> samarthaṃ paripālāne ] Nag, VePr 1896; samarthaparipālāne: Stietencron

他の刊本の異読について Stietencron の注記はなく、彼のテキストは誤記の可能性が高い。

<sup>18</sup> mamaivānugrahād ] Stietencron, Nag; mamaivānugrahāṃ: VePr 1896

<sup>19</sup> vicinityākhyātum ] Stietencron; dvijaṃ vyākhyātum: Nag, VePr 1896

サーンバは [ナーラダ仙に] 言った。「貴方の好意の故に、この美しいかつての姿を私は取り戻し、さらにまた、偉大なる魂の太陽神 (バースカラ) を己の眼で目の当たりにすることも出来ました。しかし、こうした全てを得て、再び [私の] 心は思い乱れております。神像への奉仕を護持するであろう者は、どのような者でしょうか。護持する能力のある有徳のバラモンを誰か、他ならぬ私への好意の故に、よく考えて、挙げてくださいませ、バラモンよ」

evam uktas tu sām̐bena nāradaḥ pratyuvāca tam |  
na dvijāḥ pariḡrḥṇanti devasya svīkṛtam<sup>20</sup> dhanam || 4 ||  
vidyate hi dhanam hy atra guruś<sup>21</sup> cāyaṃ pratigrahaḥ |  
devacaryāgatair dravyaiḥ kriyā brāhmī na vidyate || 5 ||  
avajñayā ca kurvanti ye kriyāṃ lobhamohitāḥ |  
apāṅkteyā bhavanūḥa te vai devalakā dvijāḥ || 6 ||

サーンバにこのように言われたナーラダ仙は、彼に答えて言った。「バラモンたちは、神が自らの所有物とした財産を受け取らない。というのも、財産はここに存在しているのであり、このような [寺院に存在する財産を施物として] 受け取ることは重大なことであるから。神像への奉仕によってもたらされる財貨による、バラモンの職務 (kriyā) は存在しない。そして、敬意もなしに職務をなすような、貪欲さによって惑乱させられた [バラモン] たちは、この世において、共食することを許されざるデーヴァラカ<sup>22</sup> というバラモンである。

devasvaṃ brāhmaṇasvaṃ ca yo lobhād upajīvati |  
sa pāpātmā pare<sup>23</sup> loke gr̥dhrocchiṣṭena jīvati |  
tato na brāhmaṇaḥ kaścid devacaryāṃ<sup>24</sup> kariṣyati || 7 ||  
vidhijñam̐ jñānavantaṃ ca paricaryākṣamaṃ tathā |  
deva eva tam ākhyātum<sup>25</sup> tasmāt tam śaraṇam̐ vraja || 8 ||

『神々の財産あるいはバラモンの財産に、貪欲の故に、寄生する罪深い者は、あの世で

Stietencron の読みは Sām̐baP の並行箇所に基づく。しかし Nag および VePr 1896 の異読 dvijaṃ は既に ab 句に同じ語が用いられており冗語的であることから、ここでは Stietencron のテキストに従った。

<sup>20</sup> devasya svīkṛtam ] Nag, VePr 1896; devasyātmīkṛtam: Stietencron

<sup>21</sup> guruś ] Stietencron, VePr 1896; guṇaś: Nag

<sup>22</sup> 原語 devalaka : デーヴァラカとは神像への供物によって生計を立てる寺院祭官のこと。MDhŚ 3, 152-167 や MBh XIII, 90, 10-11 では、祭儀の食事に与らせるべきではない (apāṅkteya) 集団の一つにデーヴァラカの名が挙げられている。このようにデーヴァラカは蔑視の対象とされ、バラモンと見なされる場合でも下級の劣ったバラモンとされた。MBh XII, 77, 8 には彼らに対してチャンダーラであるバラモン (brāhmaṇa-caṇḍāla) といった表現も見える。マガとデーヴァラカについては永井 2021b も参照。

<sup>23</sup> pare ] Stietencron; nara: Nag, VePr 1896

詩節の引用元である MDhŚ のテキスト (注 26 参照) を考慮し、ここでは Stietencron の読みに従う。

<sup>24</sup> Stietencron は Sām̐baP と BhaṣyaP の刊本が devacaryā という異読を持つとしている (Stietencron 1966 : 46, n.42)。しかし、筆者が確認した限り、いずれの刊本の読みも devacaryāṃ であった。

<sup>25</sup> tam ākhyātum ] Stietencron, Nag; tadākhyātum: VePr 1896

VePr 1896 の異読について Stietencron の注記はない。

禿鷹の食べ残して生きる<sup>26</sup>]

それ故、いかなるバラモンも決して神像への奉仕をなそうとしないだろう。他ならぬ神（太陽神）であれば、儀軌を知り、学識を有する、[神像への] 奉仕に相応しい者のことを [お前に] 教えることが [できる]。したがって、お前は彼（太陽神）に庇護を求めよ。

atha vā yaduśārdūla<sup>27</sup> ugrasenapurohitam |

gatvā gauramukhaṃ pṛccha sa te kāmāṃ vidhāsyati<sup>28</sup> || 9 ||<sup>29</sup>

あるいはむしろ、英雄ヤドウの末裔である虎よ、ウグラセーナ王<sup>30</sup>の宮廷祭官であるガウラムカ<sup>31</sup>のもとへ行き、彼に尋ねよ。彼がお前の望みを叶えてくれるだろう

nāradenaivam uktas tu sāmbo jāmbavafisutaḥ<sup>32</sup> |

sukhāsīnaṃ gr̥he vīra<sup>33</sup> ugrasenapurohitam || 10 ||

kr̥tapūrvāhnikam vīra vipraṃ gauramukhaṃ nṛpa |

vinayenopasaṃgamyā sāmbo vākyaṃ athābravīt || 11 ||

ナーラダ仙にこのように言われたジャーンバヴァティーの息子サーンバは、ウグラセーナ王の宮廷祭官であるバラモンのガウラムカが日課の朝の祭式を終えて家でくつろいでいるところへ畏まって近寄って行くと、[次のような] 言葉をかけたのであった。勇者よ、王（シャターニーカ）よ<sup>34</sup>。

mayā bhānoḥ prasādēna kāritaṃ vipulaṃ gr̥ham |

sapatnīkaṃ sasainyaṃ ca pṛthivyāṃ sāravat sthitam || 12 ||

sarvaṃ tasmin mayā dattaṃ kr̥taṃ mūrteś ca maṇḍalam |

tasmād iṣṭvā viśiṣṭebhyo deyaṃ dānaṃ manogatam || 13 ||

tat sarvaṃ mama samprītyā gr̥hāṇa tvaṃ mahāmune |

<sup>26</sup> MDhŚ 11, 26 からの引用句（ただし、b 句のみはやや異なる）。

devasvaṃ brāhmaṇasvam ca lobhenopahinasti yaḥ | sa pāpātmā pare loka gr̥dhrocchiṣṭena jīvati || 26 ||  
「神々の財産あるいはブラーフマナの財産を欲から侵害する罪深い者は、あの世で禿鷹の食い残して生きる」（渡瀬 2013 : 386）

<sup>27</sup> yaduśārdūla-男性単数呼格。この箇所は続く語頭の母音との連声が無視されており、正規サンスクリット語の連声規則に反している。しかし、叙事詩やプラーナ文献のサンスクリット語では、しばしば詩脚の切れ目において、こうした母音連続が許容される（cf. 鏝 1995 : 244, Oberlies 2003 : 1; 8）。

<sup>28</sup> gatvā gauramukhaṃ pṛccha sa te kāmāṃ vidhāsyati ] Stietencron, Nag, VePr 1896; gatvā brūhi mahābāho yady asau kurute 'nagha: Nag and VePr 1896 Note

<sup>29</sup> 以下 BhaviṣyaPI, 139, 9-68 は SāmboP に並行箇所を持たない BhaviṣyaP 独自の語りである。。

<sup>30</sup> サーンバやその父クリシュナと同じヤーダヴァ族の一人で、マトゥラー地方の王。クリシュナと敵対した悪王カンサの父であり、彼によって幽閉され王位を奪われるも、後にクリシュナがカンサを殺害したことで王位を回復する。

<sup>31</sup> MBh や他のプラーナ文献に、ウグラセーナ王の宮廷祭官（プローヒタ）としてこの名は見えない。

<sup>32</sup> nāradenaivam uktas tu sāmbo jāmbavafisutaḥ ] Stietencron, Nag, VePr 1896; tataḥ sa gatvā sāmbo tu prāṇipatyā mahāmuniḥ: Nag and VePr 1896 Note

<sup>33</sup> vīra-男性単数呼格。詩脚の切れ目での母音連続については注 27 も参照（cf. Oberlies 2003 : 8）。

<sup>34</sup> この呼びかけはサーンバの発言ではなく、BhaviṣyaP におけるサーンバ伝説の語り手であるスマントゥ仙から、その聞き手シャターニーカ王に向けられたものである。

sāmbavākyam idaṃ śrútvā pratyuvāca mahāmuniḥ || 14 ||

「太陽神（バーヌ）の好意が、私をして〔太陽神の〕巨大な寺院を作らせ、そして〔それは〕その妻たちと従者たち〔の神像〕を備えて、この地上に確固として建てられました。そこに、私は全てを施与し、そして神像のマンダラを作りました。それ故、祭儀を行って、とりわけ優れた者たちに〔私はこの寺院を〕施与せねばなりません。〔寺院を〕施与することが〔私の〕望みです。私への好意の故に、そうした全ては貴方がお受け取りになってください<sup>35</sup>、偉大なるムニよ」このサーンバの言葉を聞いて、偉大なムニは答えて言った。

gauramukha uvāca

bravīmy aham aśeṣeṇa yathāvad anupūrvaśaḥ |  
 aham vipro bhavān rājā sa ca devaparigrahaḥ |  
 aparasparam evaṃ tu grahaṇaṃ me virudhyate || 15 ||  
 brahmavidyāpraṇītāni svakarmāṇi dvijātayaḥ |  
 kurvānā na prahīyante<sup>36</sup> anyathā bhinnavṛttayaḥ || 16 ||

ガウラムカは言った。「私は、余さず正確に順を追って話すでしょう。私はバラモンであり、貴方は王族であり、そして、それは神の所有物（deva-parigraha）である。さて、このように互恵的ではなしに<sup>37</sup>〔施物を〕受け取ることは、私に差し障りがある。ブラフマンに関する明知によって示された、自らの諸々の職務（svakarman）を果たしているバラモンたちが滅びることはない。〔しかし〕職務を違えた者たちはそうではない。

kṣāntir adhyāpanaṃ<sup>38</sup> jāpaḥ satyaṃ ca yadunandana |  
 etāni viprakarmāṇi na devārthaparigrahaḥ<sup>39</sup> || 17 ||  
 yadi devārthadānaṃ<sup>40</sup> syāt tato devalakā dvijāḥ |  
 devadravyābhilāśaś ca brāhmaṇyaṃ tu vimuñcati || 18 ||

英雄ヤドウの末裔よ。忍耐、ヴェーダ聖典の教授、〔聖句の〕低唱、真実を語ること、これらはバラモンの職務である<sup>41</sup>。〔しかし〕神々のための財産を受け取ること（devārtha-

<sup>35</sup> ここでサーンバは、ガウラムカに自身が建てた寺院に相応しいバラモンについて尋ねるのではなく、寺院を彼に与え、バラモンとして太陽神像に仕えてくれるよう求めている。

<sup>36</sup> 連声違反。注 27 を参照（cf. Oberlies 2003 : 20）。

<sup>37</sup> 原語 aparaspara : この語がここで用いられている理由は判然としない。和訳では、サーンバの施与がガウラムカによる何らかの行為（例えば祭式の実行やヴェーダ聖典の教授など）に対する報酬となるような互恵的関係を伴っていない、つまり対価を持たない一方的な施与であるという意味と解した。

<sup>38</sup> adhyāpanaṃ ] Stietenron, Nag, VePr 1896; adhyayanam: Nag and VePr 1896 Note

<sup>39</sup> devārthaparigrahaḥ ] Stietenron, Nag, VePr 1896; devānnaparigrahaḥ: Nag and VePr 1896 Note

<sup>40</sup> devārthadānaṃ ] Stietenron, Nag, VePr 1896; devānadānam: Nag and VePr 1896 Note

<sup>41</sup> ヴェーダ聖典の教授（adhyāpana）はバラモンの六つの職務（ṣaṭ-karman）の一つである。MDhŚ 1, 88 および 10, 75 によれば、六つとはヴェーダ聖典の教授、ヴェーダ聖典の学習（adhyayana）、自らのために祭儀を行うこと（yajana）、他人のために祭儀を行うこと（yājana）、贈物をする（dāna）、贈物を受け取ること（pratigraha）である。聖典の教授と他人のための祭儀執行、贈物を受け取りはとくにバラモン階級のみ職務とされ、MDhŚ 10, 76 はこの三つをバラモンの生活手段と規定している。

忍辱（kṣānti）、聖句の低唱（jāpa）、真実を語る（satya）に関しては、MBh III, 198, 24 (karma śūdre kṣīr vaiṣe samgrāmaḥ kṣātriyē smṛtaḥ | brahmacaryaṃ tapo mantrāḥ satyaṃ ca brāhmaṇe sadā || 「労働は



parigraha) は、そうではない。もし神々のための財産を施与すること (devārtha-dāna) が [バラモンの職務] であるならば、それならばデーヴァラカたちはバラモンである。しかし、神々の財貨に対する欲望が、[彼らの] バラモンたる性質を失わせる。

devadvāre ca yad dānaṃ brāhmaṇāya prayacchati |  
dvāv etau pāpakartārāv ātmadoṣeṇa mānavau || 19 ||  
devārthadānaṃ<sup>42</sup> vārṣṇeya yad gṛhītvā ca yo dvijaḥ |  
śrāddhe vā yadi vā sattre<sup>43</sup> taj juhoti dadāti vā |  
bhinnavṛtto dvijaḥ pāpo rākṣasaḥ so 'bhijāyate || 20 ||

そして、神々の寺院において、もし人が施物のあるバラモンに与えるならば、この [与えた人と受け取ったバラモンの] 二人は、自らの過失により罪を犯した者たちである。ヴリシュニ族<sup>44</sup>の男よ。もしあるバラモンが神々のための財産として施与されたもの (devārtha-dāna) を受け取り、それを祖霊祭 (シュラーツダ)、あるいはサットラ祭において献供したり、あるいは布施したりするならば、そのような職務を違えた悪しきバラモンは、ラークシャサとして生まれ変わる。

dvijo devalako yatra paṅktyāṃ bhunkte mahīpate |  
annāny upasr̥ṣen nīcā sā paṅktiḥ pāpam ācaret || 21 ||  
dvijo devalako yasya saṃskāraṃ saṃprayacchati |  
so 'dhomukhān piṭṅt<sup>45</sup> sarvān ākrāmya vinipātayet || 22 ||  
ātmānaṃ pātayed yas tu so 'nyān uddharate katham |  
uddhariṣyati cātmanānam ity eṣā kalpanādhamaḥ || 23 ||

王 (サーンバ) よ。デーヴァラカであるバラモンが、ある集団の中で食事をし、食べ物に触れたならば、そのような集団は卑賤であり、罪を犯すことになるだろう。デーヴァラカであるバラモンが、ある人に一連の通過儀礼 (サンスカーラ) を授けるならば、その人は [自分の] 全ての祖霊たちを掴んで、頭を真っ逆さまに墜落させるであろう。自らを墜落させるような者が、一体どうして、他の者たちを上昇させる (救い出す) ことができようか。また、彼が自らを救い出すかもしれないと、このように想定すること (kalpanā) は最低である。

---

従僕 (シュードラ) に、農業は実業者 (ヴァイシヤ) に、戦闘は王族 (クシャトリア) に属します。清浄行、苦行、聖句 (マントラ)、真実は、常にバラモンに属します」(上村 2002a : 99) や、BhaG 18, 42 (śamo damastapaḥ śaucaṃ kṣāntir ārjavam eva ca | jñānaṃ vijñānaṃ āstikyam brahmakarma svabhāvajam || 「寂滅、自制、苦行、清浄、忍耐、廉直、理論知と実践知、信仰。以上は本性より生ずるバラモンの行為である」(上村 1992 : 136-137)) といった記述が見え、これらも広い意味でバラモンの職務 (行為) に該当すると言えよう。ただし、ここで言及される四つのみを並べてバラモンの職務とする例は確認できなかった。

<sup>42</sup> devārthadānaṃ ] Stietenron, Nag, VePr 1896; devānnadānam: Nag and VePr 1896 Note

<sup>43</sup> sattre ] Stietenron; satre: Nag, VePr 1896

<sup>44</sup> ヤーダヴァ族のうち、英雄ヴリシュニの子孫はとくにヴリシュニ族 (vr̥ṣṇi) と呼ばれる。クリシュナやサーンバ、そしてウグラセーナはこのヴリシュニ族に属する。

<sup>45</sup> piṭṅt sarvān < piṭṅ sarvān : 語末 n と語頭 s の間に t が挿入される連声 (cf. Whitney 1896 : 69 [207])。

yo lobhāc<sup>46</sup> ca bhayāc caiva kurute raviveśmanah<sup>47</sup> |  
 vṛtīm vidhatte vipratvāt patitas sa tu jāyate<sup>48</sup> || 24 ||  
 sa pratigrahamantreṇa dvijo 'śnāti parigraham |  
 devapratigrahārtheṣu vedavākyam<sup>49</sup> na vidyate || 25 ||  
 tasmād rājā na devārthaṃ vipre dadyāt kathamcana |  
 brahmasūtram ahaṃ chittvā gamiṣyāmīti gamyatām || 26 ||

また、貪欲さと恐怖の故に、太陽神（ラヴィ）の寺院を維持して生計を立てるような者は、バラモンたる状態からの脱落者（パティタ<sup>50</sup>）として生まれる。そうしたバラモンは [バラモンが受け取ってもよい施物については] 受け取りの聖句（マントラ）とともに、受け取った施物を食べる。神々が受け取るための財産（devapratigrahārtha）に関して [それをバラモンに施与することを認める] ヴェーダ聖典の言葉は存在しない。それ故、王は決して神々のための財産をバラモンに施与してはならない。[もし太陽神への施物をサーンバから受け取ることになるならば] 私はバラモンたることを示す聖紐を断ち切つて、[ここから] 去るつもりであると、貴方のご理解ください

sāmba uvāca

agrāhyaṃ ced dvijātibhyaḥ kasmai deyaṃ idaṃ mayā |  
 śrutam vā dṛṣṭapūrvaṃ vā tan me vyākhyātum arhasi || 27 ||

サーンバは言った。「もし、これがバラモンたちにとって受け取ってはならないものであるならば、私は誰に施与すべきでしょうか。かつて見たこと、あるいは聞いたことを、どうか私にご説明ください」

gauramukha uvāca

magāya samprayaccha tvaṃ puram etac chubhaṃ vibho |  
 tasyādhikāro devāne<sup>51</sup> devatānām ca pūjane || 28 ||

ガウラムカは言った。「王（サーンバ）よ、この美しい都を貴方はマガに差し上げなさい。彼（マガ）には、神々に捧げられた食物と、諸々の神像に対する礼拝（プージャナ）に関して正当な資格<sup>52</sup>がある」

<sup>46</sup> lobhāc ] Stietencron, Nag and VePr 1896 Note; haṭhāc: Nag, VePr 1896

<sup>47</sup> raviveśmanah ] Stietencron, Nag; raviveśmani: VePr 1896

VePr 1896 の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>48</sup> vṛtīm vidhatte vipratvāt patitas sa tu jāyate ] Stietencron, Nag; vidyate nāpi viprebhyaḥ patate vipradūśakah: VePr 1896

VePr 1896 の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>49</sup> vedavākyam ] Nag, VePr 1896; devavākyam: Stietencron

Stietencron は Nag および VePr 1896 の異読を注記しておらず、彼のテキストは誤記の可能性が高い。

<sup>50</sup> 原語 patita : 何らかの罪を犯したことにより、通常の身分秩序（ヴァルナ）の枠組みから脱落した者を指す (cf. 渡瀬 2013 : 464)。

<sup>51</sup> devāne ] Stietencron, Nag, VePr 1896; devasya: Aufrecht

<sup>52</sup> 原語 adhikāra : BhaviṣyaPI, 117, 37 にもマガを太陽神の財産の正当な資格の持ち主 (adhikārin) とする記述が見え、マガは太陽神の息子であるが故に、そうした資格・権利を持つと説明されている。

sāmba<sup>53</sup> uvāca

ko 'yaṃ maḡeti<sup>54</sup> te proktaḥ<sup>55</sup> kva cāsau<sup>56</sup> vasate vibho |

kasya putro dvijaśreṣṭha kimācāraḥ kimākṛtiḥ || 29 ||

サーンバは言った。「偉大なるお方よ、最勝なるバラモンよ。貴方がマガと呼んだこの人物は、何者でしょうか。彼はどこに住んでいるのでしょうか。誰の息子で、どのような習慣を持ち、どのような容貌をしているのでしょうか」

gauramukha uvāca

yo 'yaṃ maḡeti vai prokto<sup>57</sup> mago divyo dvijottamaḥ<sup>58</sup> |

nikṣubhāgnisuto<sup>59</sup> vīra<sup>60</sup> ādityātmaja ucyate || 30 ||

ガウラムカは言った。「勇者よ、[私が] マガと呼んだこの者は、神々のごとき、最上のバラモンであるマガのことで、ニクシュバー女神<sup>61</sup>とアグニ神の息子であり、太陽神(アーディティヤ) から生まれたと言われている」

sāmba<sup>62</sup> uvāca

kathaṃ sa nikṣubhāputraḥ kathaṃ vīrasutas tathā |

kathaṃ cādityatanayo mago 'sāv<sup>63</sup> ucyate punaḥ<sup>64</sup> || 31 ||

サーンバは言った。「彼は、どうしてニクシュバー女神の息子と、またどうしてアグニ神(vīra)の息子と言われるのでしょうか。またそのマガは、その上どうして太陽神(アーディティヤ)の息子であると言われるのでしょうか」

gauramukha uvāca

<sup>53</sup> sāmba ] Stietencron, Nag; sāmba: Aufrecht

<sup>54</sup> Double Sandhi (magah + iti > maga + iti > maḡeti)。次詩節 a 句も同様 (cf. Oberlies 2003 : 35ff.)。

<sup>55</sup> te proktaḥ ] Nag, Aufrecht, VePr 1896; tvat proktaḥ: Stietencron

<sup>56</sup> cāsau ] Stietencron, Aufrecht; vāsau: Nag, VePr 1896

<sup>57</sup> prokto ] Stietencron, Nag, VePr 1896; vipro: Aufrecht  
Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>58</sup> mago divyo dvijottamaḥ ] Stietencron, Nag, VePr 1896; mama śodityor dvijātayaḥ (?): Aufrecht

<sup>59</sup> nikṣubhāgnisuto ] Aufrecht; nikṣubhāgnisutaḥ: Stietencron, Nag and VePr 1896 Note; nikṣubhāyāḥ suto: Nag, VePr 1896

<sup>60</sup> vīra-男性単数呼格。母音連続については注 27 を参照 (cf. 鏝 1995 : 244, Oberlies 2003 : 2)。

<sup>61</sup> 太陽神の妻の一人で、その名前は Bhaviṣya I, 79, 67 によれば「動かざるもの」すなわち大地を意味するとされる。プラーナの神話では太陽神スーリヤの妻としてサンジュニャー (Samjñā) とチャーヤー (Chāyā) の二人が知られ、ニクシュバーは後者のチャーヤーと同一視される。なお、サンジュニャーについてはラージュニー (Rājñī) という別の女神が同一視される。BhaviṣyaP I, 79 によれば、太陽神には本来妻としてヴィシュヴァカルマン神の娘サンジュニャーのみがいたが、彼女は夫の放つ光熱を苦として、自らの影 (チャーヤー) に夫の世話を代理させたため、太陽神は二人の妻を得ることになったという。またこれに関連して、ヴィシュヴァカルマン神は太陽神の光を苦とする娘のために、その輝きを材料として他の神々のための道具や武器を作り出し、これによって太陽神の輝きを減じさせたという。BhaviṣyaP I, 129, 8-15 (= SāmbaP 26, 5-12) によれば、サーンバが手に入れた太陽神像も同様にして太陽の輝きから作り出されたものとされる。

<sup>62</sup> sāmba ] Stietencron, Nag, VePr 1896; sāmba: Aufrecht

<sup>63</sup> 'sāv ] Stietencron, Nag, VePr 1896; 'sau: Aufrecht

<sup>64</sup> punaḥ ] Stietencron, Aufrecht; 'nagha: Nag, VePr 1896

mānuṣatvaṃ gatā<sup>65</sup> devī nikṣubhā kila yādava |  
 gatā śāpam avāpyeha bhāskarāl lokapūjita<sup>66</sup> || 32 ||  
 gotraṃ mihiram ity āhus tasmai brāhmaṇyam<sup>67</sup> uttamam |  
 sujihvo<sup>68</sup> nāma dharmātmā ṛṣiputraḥ<sup>69</sup> purānagha || 33 ||  
 tasyātmaajā samutpannā nikṣubhā sā<sup>70</sup> varāṅganā |  
 rūpeṇāpratimā loke hāralilā matā tu sā<sup>71</sup> || 34 ||

ガウラムカは言った。「英雄ヤドゥの末裔よ。伝え聞くところでは (kila)、人間の姿となった女神ニクシュバーは、太陽神 (バースカラ) から呪いを得た後、この世において世間で尊崇されるようになった。汚れ無き者 (サーンバ) よ。スジフヴァ<sup>72</sup> という名前で、法 (ダルマ) をよく心得た、聖仙の息子がおり、彼について人々は「氏姓 (ゴートラ) はミヒラである。そのバラモンたる性質は最上である」と言っていた。その彼の娘として生まれたのが、美しい肢体をした、かのニクシュバー女神であり、彼女はこの世で容姿の美しさの点で比類なく、真珠の如く美しい<sup>73</sup>と考えられていた。

pitur niyogāt sā kanyā viharej jātavedasam<sup>74</sup> || 35 ||  
 viharantya<sup>75</sup> yathānyāyaṃ samiddhaḥ pāvakas<sup>76</sup> tathā<sup>77</sup> |  
 atha tāṃ devadeveśo hy<sup>78</sup> aṃśumālī dadarśa ha || 36 ||

その娘は、父の命令に従って [祭儀のため] 祭火を配置せねばならなかった。そこで、彼女は [祭火を] 配置しつつ、規則通りに祭火を燃やしていた。その時、彼女を神々の

<sup>65</sup> gatā ] Nag, Aufrecht, VePr 1896; gatvā: Stietencron

Nag などの異読について Stietencron の注記はなく、彼のテキストは誤記の可能性はある。

<sup>66</sup> lokapūjita ] Stietencron, Nag, VePr 1896; lokapūjitāt: Aufrecht

<sup>67</sup> āhus tasmai brāhmaṇyam ] Stietencron, Nag, VePr 1896; āhur vrataṃ vai brāhmam: Aufrecht

<sup>68</sup> sujihvo ] Stietencron, VePr 1896; sujihvā: Nag; rjvāhvo: Aufrecht

Stietencron 1966 : 93, n.62 は Aufrecht の異読を rjvāhvo とするが、筆者が確認した限り誤りである。

<sup>69</sup> dharmātmā ṛṣiputraḥ ] Stietencron, Nag, VePr 1896; karmātmā ṛṣir āsit: Aufrecht

<sup>70</sup> nikṣubhā sā ] Stietencron, Nag, VePr 1896; nikṣubhāsau: Aufrecht

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>71</sup> hāralilā matā tu sā ] Stietencron, Nag, VePr 1896; hāvanī nāma nāmataḥ: Aufrecht

<sup>72</sup> ニクシュバー女神の父親であるこの聖仙の名前は、諸刊本の間で一致しないばかりか、同じ刊本中でも一定していない。ここではスジフヴァという名前が用いられているが、BhaviṣyaP I, 139, 46ff. ではリグジフヴァ (rgjihvah) という名前も現れる。

<sup>73</sup> 原語 hāralilā : Stietencron の独訳 (Stietencron 1966 : 187) や Hazra 1958 : 79 は、この語を「ハーラーラー」という固有名詞に解釈している。Aufrecht が伝える異読 (「ハーヴァニーという名前の (hāvanī nāma nāmataḥ) ) は、そのような解釈を支持するように見える。しかし、物語中でニクシュバー女神がこの名前で呼ばれる箇所はないばかりか、むしろ彼女の名前はニクシュバーで一貫している印象も受ける。Aufrecht の異読を採用しない場合、この語を固有名詞として解釈する必然性は低いと判断して、和訳では彼女の美しさの比喻 (真珠 (hāra) のごとき美しさ (līlā) を持つ) と解した。

<sup>74</sup> jātavedasam ] Stietencron, Aufrecht, VePr 1896; jātavedasi: Nag

<sup>75</sup> viharantya ] Stietencron, Aufrecht, VePr 1896; viharanti: Nag

<sup>76</sup> samiddhaḥ pāvakas ] Stietencron, VePr 1896; samiddhe pāvake: Nag; samiddham pāvakaḥ: Aufrecht

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>77</sup> tathā ] Stietencron, Nag, VePr 1896; tadā: Aufrecht

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>78</sup> hy ] Stietencron, Nag, VePr 1896; om. : Aufrecht

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

主である太陽神（アンシュマーリン）がまさに目にしたのであった。

rūpayauvanasaṃpannām tataḥ kāmavaśaṃ gataḥ |  
 cintayāmāsa deveśaḥ<sup>79</sup> katham tām vai bhajāmy aham<sup>80</sup> || 37 ||  
 anayā vihrto<sup>81</sup> yo 'yaṃ pāvako devapūjitaḥ |  
 enam<sup>82</sup> āviśya tanvaṅgīm bhajeyaṃ lokapūjitām || 38 ||  
 iti saṃcintya deveśaḥ sahasrāṃśur divaspatiḥ |  
 viveśa pāvakaṃ vīra tatputraś cābhavat tadā<sup>83</sup> || 39 ||

そうして、美しさと若々しさに満ちた彼女に対する情欲に支配された神々の主は「いかにすれば、私は彼女を我がものにできようか」と考えた。「彼女によって配置された、神々によって尊崇されるこの祭火の中に入り、華奢な手足をした、世間で尊崇される彼女のことを、私は我がものにしよう」と考えて、神々の主であり、天の支配者たる太陽神（サハスラーンシュ）は、祭火の中に入った。そして、その時、彼はその [祭火の] 息子となったのだった。勇者（サーンバ）よ。

tato vilāsālāvanyarūpayauvanaśālinī |  
 samiddham laṅghayitvāgniṃ jagāmāyatalocanā || 40 ||  
 kruddhaḥ svarūpam āsthāya dṛṣtvā kanyāṃ sa pīḍitaḥ |  
 karaṃ kareṇa saṃgrhya tatas tām havyavāhanaḥ<sup>84</sup> || 41 ||  
 uvāca yaduśārdūla nodito bhāskareṇa tu<sup>85</sup> |

さてそれから、燃やされている祭火を、艶めかしさと魅力と美しさと若々しさに満ち、切れ長の目をした彼女が跨いで行ってしまった<sup>86</sup>。[その行為に] その祭火 (havyavāhana) は怒って本来の姿をとると、彼女を見て気分を害し、[自らの] 手で [彼女の] 手を捕まえてから、[祭火の中に入っている] 太陽神（バースカラ）に扇動されて、彼女に [次のように] 言ったのである。英雄ヤドゥの末裔たる虎よ。

<sup>79</sup> deveśaḥ ] Stietencron, Nag, VePr 1896; tanvaṅgīm: Aufrecht

<sup>80</sup> vai bhajāmy aham ] Stietencron, Nag, VePr 1896; vibhaje hy aham: Aufrecht

<sup>81</sup> anayā vihrto ] em. ; anayāvahrto: Stietencron, Nag, VePr 1896; anayā vidhuto: Aufrecht

直前まで用いられている viharet や viharantya といった表現、vi で始まる Aufrecht の異読 vidhuto の存在を考慮してテキストを改める。

<sup>82</sup> enam ] Stietencron; vanam: Nag, VePr 1896; etam: Aufrecht

<sup>83</sup> tatputraś cābhavat tadā ] Stietencron, Nag, VePr 1896; tadā taṃ vibharānaṃ (?): Aufrecht  
 Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>84</sup> tatas tām havyavāhanaḥ ] Stietencron, Nag, VePr 1896; uvāca yadunandana: Aufrecht

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。厳密には Aufrecht の異読は次詩節の a 句 (uvāca yaduśārdūla) に対応したもので、次注の通り BhaviṣyaPI. 139, 42ab に相当する詩節が欠けている。

<sup>85</sup> uvāca yaduśārdūla nodito bhāskareṇa tu ] Stietencron, Nag, VePr 1896; om. : Aufrecht  
 Stietencron は Aufrecht における詩節の欠落を注記していない。

<sup>86</sup> 祭火を跨ぐことは禁忌であり、MDhŚ 4, 54 や YāDhŚ 1, 136 等にこれを禁じた規定が見出される。

MDhŚ 4, 54ab : adhasṭān nopadadyāc ca na cainam abhilaṅghayet |

「[火を] 地面に置いてはならない。それを跨いではならない。」(渡瀬 2013 : 138)

vedoktaṃ vidhim utsrjya yathāhaṃ<sup>87</sup> laṅghitas tvayā || 42 ||  
 tasmān mattaḥ<sup>88</sup> samutpannas tava<sup>89</sup> putro bhaviṣyati |  
 jaraśabda<sup>90</sup> iti khyāto vaṃśakūrtivivardhanaḥ || 43 ||  
 agnijātyā magāḥ proktāḥ somajātyā dvijātyayā |  
 bhojakādityajātyā hi divyās te parikūrtitāḥ || 44 ||

「お前がヴェーダ聖典に語られる儀軌を守らず、私を跨ぎ越えたが故に、私を父として、お前に息子が生まれることになるだろう。「ジャラシャブダ<sup>91</sup>」という名で知られる彼は、一族の名声を高めることになるだろう。火神（アグニ）を生まれとする者たちはマガと呼ばれる。月神（ソーマ）を生まれとする者たちはバラモンたちである。ボージャカたちは太陽神（アーディティヤ）を生まれとする者たちである。神々の系譜に属する彼らは広く称えられることになるだろう」

<sup>87</sup> yathāhaṃ ] Stietencron, Nag, VePr 1896; yathāyaṃ: Aufrecht

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>88</sup> tasmān mattaḥ ] Stietencron, Nag, VePr 1896; tasmāt sa tu: Aufrecht

<sup>89</sup> samutpannas tava ] Stietencron, Aufrecht; samutpanno na ca: Nag, VePr 1896

<sup>90</sup> jaraśabda ] Nag, VePr 1896; jaraśastra: Stietencron; jalagamvu: Aufrecht

暫定的に Nag や VePr 1896 の読みに従う。Stietencron の読みは彼の修正された読みである。同じ読みを持つ写本の存在が示唆されるとはいえ、以下の点を考慮すれば、その採用には疑問も残る。

Stietencron は Hodivala 1920 や Hazra 1958 に従ってテキストを jaraśastra と読むと断っている (Stietencron 1966 : 94, n.73 “So nach HAZRA und HODIVALA in einigen Mss.”) が、問題は彼が Hodivala 1920 や Hazra 1958 の該当頁を明記していないことである。

Hodivala 1920 : 76 は、当該箇所を読み Jarashashda の誤った読みではないかとしているが、これはあくまでも彼の推測に過ぎない (“The name *Jarashabda* was probably a bad reading for *Jarashashda*.”)。また、彼はこの語がザラスシュトラの訛語であることには同意しているが、テキストを Jaraśastra と読むことを主張しているわけではない。一方、Hazra 1958 : 79 には「いくつかの写本によれば Jaraśastra」という記述が見える (“Gauramukha spoke of the ‘Magas’, whom he described as descendants of Jaraśabda (or Jaraśastra, according to some Mss).”). しかし、具体的な写本情報への言及はなく、また同箇所における注記 (Hazra 1958 : 79, n.99) も、Aufrecht を参照してボードリアン図書館蔵の写本が jalagamvu という読みを伝えると記すのみである (“The Bodlean Ms reads ‘jalagamvu.’—See Aufrecht, *Bod Cat*, p 33a”).

この他に藤原 2002 : 53 には「Jaraśabda (ボドレイ写本では Jaraśastra) がマガたちの始祖である」といった記述が見える。ここで言及される「ボドレイ写本」が Aufrecht にその一部が転記された BhaviṣyaP の写本であることは、別の箇所の記述から明らかであるが、しかし、その異読は上掲の通り jalagamvu であって jaraśastra ではない。藤原 2002 はこの記述の前後で Hodivala 1920 の他、Scheffelowitz 1933、Humbach 1978 を参照したことを注記しているが、ここに記された異読情報を支持する記述はそのいずれにおいても見出せなかった。

<sup>91</sup> Hazra 1958 : 79 はジャラシャストラ (Jaraśastra) という異読の存在を伝える (注 90 を参照)。マガの祖とされるこの人物については、複数の先行研究がゾロアスター教の開祖ザラスシュトラ (Av. Zaruštra) との関連を指摘している (Hodivala 1920 : 76、Scheffelowitz 1933 : 299、Hazra 1958 : 98、Stietencron 1966 : 236、Humbach 1978 : 250)。また、邦語の概説書にもこれに従う見解が見える (岡田 1988 : 166、青木 2019 : 114)。

Hodivala 1920 ではこのジャラシャブダの誕生物語とゾロアスター教の宗教文献『デーナカルド』に見える教祖伝との比較がなされているが、説得的とは言い難い。Humbach 1978 は BhaviṣyaP に見えるこのジャラシャブダへの言及は、ムガル帝国時代アクバル帝の宮廷におけるパールシーとの交流の結果生じたものではないかと推測している。

tām evam uktvā bhagavān ādityo 'ntardadhe 'gnimān<sup>92</sup> |  
 athotpannām prajām jñātvā dhyānayogena vai<sup>93</sup> ṛṣiḥ || 45 ||  
 patitaḥ syān mahātejā ṛgjihvaḥ<sup>94</sup> sumahāmatiḥ |  
 śāpam udyamya tejasvī<sup>95</sup> ṛgjihvo<sup>96</sup> vākyaṁ abravīt || 46 ||  
 ātmāparādhāt kāmīnyā yathā garbho 'nalāvṛtaḥ |  
 sambhūtas te mahābhāge<sup>97</sup> apūjyo 'yaṁ bhaviṣyati || 47 ||

彼女にこのように言うと、祭火の中の太陽神（アーディティヤ）は姿を隠した。さて、偉大な輝きを有する、非常に賢き聖仙、輝けるリグジフヴァ<sup>98</sup>（＝スジフヴァ）は、生まれた子供のことを深い瞑想行（dhyānayoga）によって知り、彼が墮落するようにという呪いをかけると<sup>99</sup>、[次のような] 言葉を語った。「大いに幸運なる女よ、お前自身の過失の故に、火で覆われて生まれたのであるから、ふしだらなお前のこの胎児は尊崇されぬ者（apūjya）となるであろう」

putraśokābhisamṭaptā bāṣpaparyākulekṣanā<sup>100</sup> |  
 cintayāmāsa duḥkhārtā tam ekaṁ jvalanākṛtim || 48 ||  
 tato devavarīṣṭhasya mama yonisamudbhavaḥ |  
 ayaṁ datto mahāśāpaḥ pūjyatām kartum arhasi || 49 ||  
 bhavet pūjyo hi me putro deveśvara tathā kuru |

[このように言われて、] 息子に関する憂いに押しつぶされ、その眼に涙を溢れさせた彼女は、苦しみに苛まれながら、火の姿をした彼（太陽神）一人だけを心に思った。「すると、私の胎に生じたのは、神々の中で最も優れた方の [息子] である。[その彼に] このような強大な呪いがかけられた。どうか [息子が] 尊崇されるようにしてください。私の息子が尊崇される者となるように、神々の主よ、そのようにしてください」

evaṁ cintayāmānas tu bhagavān aryamā kila || 50 ||  
 āgneyaṁ rūpam āśritya cedam vacanam abravīt |

<sup>92</sup> 'ntardadhe 'gnimān ] Stietencron, Aufrecht; 'ntaratas tadā: Nag; 'ntaradhīyata: VePr 1896

<sup>93</sup> 連声違反。注 27 も参照 (cf. Oberlies 2003 : 19)。ただし、この連声違反は本章 (BhaviṣyaPI, 139) に頻出する他の例とは異なり、詩脚の区切れに生じたものではない。

<sup>94</sup> ṛgjihvaḥ ] Stietencron, Nag; ṛjihvaḥ: VePr 1896

<sup>95</sup> 連声違反。注 27 を参照 (cf. Oberlies 2003 : 14)。

<sup>96</sup> ṛgjihvo ] Stietencron, Nag; ṛjīsvā: VePr 1896

<sup>97</sup> mahābhāga-女性単数呼格。注 27 を参照 (cf. Oberlies 2003 : 20)。

<sup>98</sup> BhaviṣyaPI, 139, 33 に現れるスジフヴァのことを指す。

<sup>99</sup> この箇所は原文の解釈が困難である。刊本のテキストの誤りも想定されるが、ここでは暫定的に Stietencron の訳に従い patitaḥ syāt を次の śāpam udyamya と繋げて読む。ただし、続く聖仙の発言やその後のニクシュパーや太陽神の発言において呪いの内容が apūjya とされていることを考慮すると、patita となることを呪いの言葉とするこの解釈はやや不相当である。

Stietencron 1966 : 188, n.25 には第二の解釈として主語を聖仙リグジフヴァと解釈し、patitaḥ syāt を直前の絶対詞 jñātvā と関連させて、聖仙は子供が生まれたこと、そして自身が墮落したことを知ったする解釈も提示されている。同様の解釈は Hazra 1958 : 80 における当該箇所の英訳にも見出される (“He deemed himself lowered”)

<sup>100</sup> bāṣpapary'- ] Stietencron; bālā pary°- : Nag; bālyapary°- : VePr 1896

snigdho gambhīranirghoṣaḥ śānto jvaravivarjitah || 51 ||

rgjihvah<sup>101</sup> sumahātejā dharmam carati suvrataḥ<sup>102</sup> |

tenotsrṣṭam mahāśāpam nānyathā kartum utsahe || 52 ||

一方、伝え聞くところでは (kila) [彼女によって] このように心に思われていた太陽神 (アリアマン) は、火の姿をとると、次のような言葉を語ったという。「温情にあふれ、低く落ち着いた (=朗誦に適した) 声であり、平静で憂い無く、偉大な輝きを有するリグジフヴァは、警戒をよく守る者であり、義務 (ダルマ) を果たしている。その彼によって発せられた強大な呪いを、別のようにすることは私には出来ない。

kiṃ tu kāryagarīyastvād<sup>103</sup> ātmano योगyam uttamam |

tava putram vidhāsyāmi cāpūjyam vedapāragam || 53 ||

vaṃśāś ca sumahāms tasya nivasiṣyati bhūtale |

mamāṅgāni mahātmāno vasiṣṭhā<sup>104</sup> brahmavādīnaḥ || 54 ||

madgāyanā madyajanā madbhaktā matparāyaṇāḥ |

mama śúsrūśakāś caiva mama ca vratacāriṇaḥ || 55 ||<sup>105</sup>

tvām ca mām ca yathānyāyam vedatattvārthadarśinaḥ<sup>106</sup> |

pūjayiṣyanti niratāḥ sadā madbhāvabhāvitāḥ || 56 ||

しかしながら、事がより重大であるが故に、私はお前の息子を私自身にとって最も有用な者として、尊崇されない者 [であるとはいえ] ヴェーダ聖典に完全に精通した者として任じることにしよう。そして、その彼の一族は偉大な一族としてこの地上に住まうことになるであろう。彼らは、私の四肢であり、偉大な魂を持ち主であり、最も優れた者たちであり、根本原理 (ブラフマン) について議論する者たちである。彼らは、私のことを歌い称え、私に対して祭式を行い、私のことを信愛し、私に対して心身を捧げる者たちであり、私への奉仕者たちに他ならず、そして、私への警戒をよく果たす者たちである。ヴェーダ聖典の真の意味を知り、私という存在から生み出された彼らは、常に喜びながら、規則通りに、お前に対しても私に対しても礼拝 (プージャー) をなすであろう。

matkarmaṇām madaṅgānām madbhāvaviniveśanāt |

virajā matprasādēna mām evaiṣyanty asaṃśayam || 57 ||

jaṭāśmaśrudharā nityam sadā mayi parāyaṇāḥ |

pañcakālavidhānajñā vīra kālasya yajvinaḥ || 58 ||

清浄なる彼らは、私の諸々の行為、私の四肢、私の本質に従属するが故に、私の好意に

<sup>101</sup> rgjihvah ] Stietencron, Nag; rjihvah: VePr 1896

<sup>102</sup> suvrataḥ ] Stietencron; suvrata: Nag, VePr 1896

<sup>103</sup> kāryagarīyastvād ] Stietencron, Nag; kāryam garīyastvād: VePr 1896

<sup>104</sup> vasiṣṭhā ] Stietencron, VePr 1896; vāsiṣṭhā: Nag

Stietencron は Nag における異読 vāsiṣṭhā について、マガを著名な聖仙ヴァスィシュタに関連付ける誤った読みと見なしている (Stietencron 1966 : 95, n.82)。なお、彼は VePr 1896 の異読を vāsiṣṭhā と注記するが、筆者が確認した限りこれは誤記のようである。

<sup>105</sup> BhaviṣyaP I, 139, 77cd-78ab にも、本詩節とほぼ同じ表現が現れる。

<sup>106</sup> vedatattvārtha°- ] Stietencron, VePr 1896; vedam tattvārtha°- : Nag



よって、[死後に] 他ならぬ私のもとへ至るであろう。これは疑いない。彼らは、いつも編まれた髪と髭をしており、常に私に心身を捧げる者たちである。彼らは、五つの時間の儀規<sup>107</sup> (pañca-kāla-vidhāna) を知る、時間 (カーラ) の崇拜者たちである<sup>108</sup>。勇者 (サーンバ) よ。

pūrṇaikam dakṣiṇe<sup>109</sup> pāṇau varśma<sup>110</sup> vāmena dhārayan |

patidānena vadanam pracchādya niyataḥ śuciḥ || 59 ||

prāṇam hi mahatām kṛtvā tato bhujīta vāgyataḥ |

[マガは] プールナイカ<sup>111</sup>を右の手に、ヴァルシュマン<sup>112</sup>を左 [の手] で持ちながら、パティダーナ<sup>113</sup>によって口を覆って、心落ち着き、清浄である。彼は、息を大きく吐いた後、言葉を発さず食事せねばならない。

ayamāc cāprasādāc ca vyākulendriyacetasā || 60 ||

vidhīhīnam mantrahīnam ye vai yakṣyanti<sup>114</sup> mām atah |

<sup>107</sup> 先行研究はこの記述をゾロアスター教におけるガー (Gāh) すなわち一日の五区分およびその各時における祈祷の風習と比較する (足利 1953 : 95、Stietencron 1966 : 268-269、Humbach 1978 : 248)。

<sup>108</sup> Stietencron はこの記述から、ボージャカがゾロアスター教における時間崇拜者、すなわち時間神ズルヴァーンの崇拜者であった可能性を想定する (Stietencron 1966 : 190, n.90; 266)。しかし、ここまで太陽崇拜者として描写されてきたボージャカが突如、時間崇拜者と呼ばれるのはやや奇異でもある。むしろ、ここでは時間 (カーラ kāla) という語が太陽神の別名として用いられているとも解釈できる。太陽神の別名としてカーラが用いられる例としては、Rāma VI, 105, 8 (いわゆる Āditya-hṛdaya) や MBh III, 3, 18 (太陽神の百八の名前のリスト) が挙げられる。

<sup>109</sup> pūrṇaikam dakṣiṇe] Stietencron; pūrṇaikadakṣiṇe: Nag, VePr 1896

<sup>110</sup> varśma ] Stietencron; varma: Nag, VePr 1896

Nag および VepR 1896 は varma という読みを伝えており、Stietencron の varśma は彼による修正された読みである。Aufrecht はこの詩節の前後で転記を中略しているため、その異読を確認できない。

しかし、この語が Av. barəsmān の訛語と推定されること (注 112 参照)、さらに BhaviṣyaPI, 140, 42 で言及される、通常のパラモン (Darbha) と対比されたマガの祭儀用の植物の名前について、Nag と VePr 1896 が伝える読み dharma に対する Aufrecht の異読 varśmā の存在を考慮して、本稿もここでは Stietencron の修正を支持する。同様の修正は Hazra 1958 : 81, n.107 も提案している。

<sup>111</sup> 原語 pūrṇaika : マガが儀礼で用いる何らかの道具。pūrṇa (「満たされた」) という語からは何らかの液体を保管する道具であることが推測されるが、先行研究もイラン語への比定を試みておらず詳細は不明 (cf. Humbach 1978 : 248 “Although we do not know the meaning of pūrṇaika, ...”)。足利 1953 : 95 はこれを聖水を入れる壺または容器ではないかとしている。この語は MW や Böth では pūrṇaka という語形で立項されており (足利 1953 : 95 や Hazra 1958 : 81 もテキストの引用において pūrṇaka と記している)、また、その語義の一つに「マガの使う器の一種 (a particular vessel or utensil (used by the Magas) / ein bestimmte Geräthe (bei den Maga))」が挙げられている。ただし、この語義の典拠として Böth が挙げる“ViṣṇuP 2, 5, 384”は、現行の ViṣṇuP の刊本に該当箇所を確認できなかった。

<sup>112</sup> 原語 varśman : ズロアスター教の神官が儀礼の際に手に持つ木枝の束バルスマン (Av. barəsmān) に比定される。バルスマンは今日ではバルソム (Barsom) と呼ばれ、木枝の代わりに金属製の細い棒が用いられる。

<sup>113</sup> 原語 patidāna : ズロアスター教の神官が身に付ける口覆いパティダーナ (Av. paiti.dāna) に比定される (今日ではパダーン (Padān) と呼ばれる)。ゾロアスター教では呼吸が不浄なものと見なされるので、それによって聖火を汚すことを避けるために、神官は儀礼に際して口を覆う。

<sup>114</sup> vai yakṣyanti ] Stietencron, Nag; yajīṣyanti: VePr 1896

VePr 1896 の異読について Stietencron の注記はない。

te `pi svargāc cyutāḥ klāntā ramante sūryasaṃnidhau || 61 ||

心の落ち着きも好意もないが故に、混乱した感官や思考でもって、儀軌も聖句（マントラ）も欠いたまま私に対する祭式を行わんとし、そのこと故に、天界（スヴァルガ）から追放され疲弊したとしても、彼ら（マガたち）は太陽神（スーリヤ）の近傍に留まる。

evamaṃvidhās tava sutā bhaviṣyanti<sup>115</sup> mahītale |  
magavaṃśe mahātmāno vedavedāṅgapāragāḥ || 62 ||

evam āśvāsya tāṃ devīm bhāskaro vāritaskaraḥ |  
antardadhe mahātejāḥ sā ca harṣam avāpa ha || 63 ||

このように任じられたお前の子孫は、この地上においてマガの一族の中で、偉大なる魂を有し、ヴェーダ聖典とその補助学に通じた者たちとなるであろう<sup>116</sup>と。このように、その女神を慰めた後、水を奪い去る者<sup>117</sup>、偉大な輝きを有する太陽神（バースカラ）は姿を消した。そして彼女（ニクシュバー）は誠に歓喜した。

evam ete samutpannā bhojakāḥ kṛṣṇanandana |  
naikṣubhās<sup>118</sup> te tathādityā utpannā lokapūjītāḥ || 64 ||  
teṣām etat puram dehi paryāptās<sup>119</sup> te pratigrahe<sup>120</sup> |  
tvadīyasyāsya me vīra tathā bhāskarapūjane || 65 ||

クリシュナの息子よ、以上のようにして生まれたこの者たちがボージャカたちである。彼らはニクシュバー女神の子供、そして太陽神（アーディティヤ）の子供として生まれた、世間で尊崇される者たちである。彼らに「お前の」この都を与えよ。勇者よ。彼らは、私よりもお前が所有するこの「都を」受け取るのに相応しく、また太陽神（バースカラ）の礼拝（プージャー）にも相応しい」

tasya gauramukhasyedam vākyaṃ śrutvā sa yādavaḥ |  
sāmbho jāmbhavatīputraḥ praṇamya śirasoktavān || 66 ||  
kva vasante mahātmāna ete bhāskaraputrakāḥ |

<sup>115</sup> bhaviṣyanti ] Stietencron, Nag; bhavaṣyanti: VePr 1896

<sup>116</sup> ここでは、ニクシュバー女神の子孫（BhaviṣyaPI, 139, 64 によればボージャカ）とマガに区別があると解釈して和訳した。BhaviṣyaP には、同じ文脈中でありながらマガとボージャカがお互いに言い換えられた箇所が見出される。例えば、BhaviṣyaPI, 139, 28 においてガウラムカは都をマガに与えるよう助言するが、同 64-65 ではボージャカに与えるようにと述べている。また同 67-68 ではボージャカの居場所を尋ねるサーンバに対して、ガウラムカはマガの居場所を知らないと答えている。

その一方で、BhaviṣyaPI, 141, 5-11 には、サーンバがシャーカ大陸から連れてきたマガの男性とヤードヴァ族の一氏族であるボージャ族（Bhoja）の女性との間に生まれたのがボージャカ（Bhojaka）たちであるという、マガとボージャカの区別を前提としたような記述も見える。

<sup>117</sup> 原語 vāritaskara : 水 (vāri) の盗人 (taskara) の意で、太陽が水を蒸発させることを指す。インドには太陽光線を通じて水が天地を循環するという観念があり、太陽は蒸発させた水を天に保持し、それを雨期に放出すると考えられた (cf. 阪本 2015 : 12-16)。

<sup>118</sup> naikṣubhās ] Stietencron; viṣṇubhās: Nag, VePr 1896

<sup>119</sup> paryāptās ] Stietencron, Nag; paryāptas: VePr 1896

<sup>120</sup> pratigrahe ] Stietencron, Nag; pratigrahaḥ: VePr 1896

bhojakā dvijaśārdūla yena tām ānayāmy aham || 67 ||

ガウラムカのこうした言葉を聞いて、ヤーダヴァ族のその男、すなわちジャーンバヴァティーの息子サーンバは、頭を下げて拝礼してから言った。「偉大なる魂を持つお方、バラモンの中の虎たるお方よ。いずこに、太陽神（バースカラ）の子孫たる、このボージャカたちは住んでいるのでしょうか。どのようにして、私は彼らを連れて来ましょうか」

gauramukha uvāca

nāhaṃ jāne mahābāho vasante yatra vai magāḥ |

jānīte tām ravir<sup>121</sup> vīra tasmāt taṃ śaraṇaṃ vraja || 68 ||

ガウラムカは言った。「勇者よ、腕長き者よ。マガたちが住んでいる場所を私は知らない。[だが] 太陽神（ラヴィ）は彼らを知っている。それ故に、貴方は彼に庇護を求めなさい」

brāhmaṇenaivam uktas tu praṇamya śirasā ravim |

jagāda bhāskaraṃ sāmhaḥ kas te pūjāṃ kariṣyati || 69 ||

さて、バラモン（ガウラムカ）にこのように言われたサーンバは、太陽神（ラヴィ）に頭を下げて拝礼してから、太陽神（バースカラ）に言った。「誰であれば貴方に対する礼拝（プージャー）をなしえましょうか」

vijñaptā<sup>122</sup> tv atha<sup>123</sup> sām̐bena pratimā taṃ uvāca ha |

na yogaḥ<sup>124</sup> paricaryāyāṃ jambūdvīpe<sup>125</sup> mamānagha || 70 ||

mama pūjākārān<sup>126</sup> gatvā śākadvīpād ihānaya |

lavaṇodāt pare pāre kṣīrodena samāvṛtaḥ<sup>127</sup> || 71 ||

jambūdvīpāt<sup>128</sup> paras tasmāc<sup>129</sup> chākadvīpa iti<sup>130</sup> smṛtaḥ<sup>131</sup> |

すると、サーンバに尋ねられた神像<sup>132</sup>は彼に言った。「罪なき者（サーンバ）よ、私への

<sup>121</sup> jānīte tām ravir ] Stietencron, Nag; ravir tām jānate: VePr 1896

VePr 1896 の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>122</sup> vijñaptā ] em.; vijñaptā: Stietencron; vijñaptas: Nag, VePr 1896

Stietencron における vijñaptā を誤記と判断してテキストを vijñaptā に改める。なお、Nag と VePr 1896 の異読を vijñaptas と記す彼の注記 (Stietencron 1966 : 46, n.45) もおそらく誤り。

<sup>123</sup> atha ] Stietencron; eva: Nag, VePr 1896

<sup>124</sup> yogaḥ ] Stietencron, Aufrecht; yogāḥ: Nag, VePr 1896

<sup>125</sup> jambūdvīpe ] Stietencron, Nag, VePr 1896; jambudvīpe: Aufrecht

<sup>126</sup> pūjākārān ] Stietencron, Aufrecht; pūjākaraṃ: Nag, VePr 1896

<sup>127</sup> samāvṛtaḥ ] Stietencron, Nag; samāvṛtaṃ: Aufrecht, VePr 1896

<sup>128</sup> jambūdvīpāt ] Stietencron, Nag, VePr 1896; jambudvīpāt: Aufrecht

<sup>129</sup> paras tasmāc ] Stietencron; paro yasmāc: Nag; paraṃ yasmāc: Aufrecht, VePr 1896

<sup>130</sup> chākadvīpa iti ] Stietencron, Nag, VePr 1896; chākadvīpam iti: Aufrecht

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>131</sup> smṛtaḥ ] Nag; śrutaḥ: Stietencron; smṛtaṃ: Aufrecht, VePr 1896

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>132</sup> 神像はそれが象る神本人と同一視される。ここでは寺院に置かれた太陽神像が太陽神本人としてサーンバと会話している。

奉仕に相応しい者は、ジャンブー大陸<sup>133</sup>にはいない。お前は、私への礼拝（プージャー）をなす者たちのところへ行き、彼らをシャーカ大陸<sup>134</sup>からここに連れて来なさい。シャーカ大陸は、このジャンブー大陸から離れており、塩水の海から遥かに離れたところがあり、乳の海によって取り囲まれていると伝承されている。

tatra puṇyā janapadās cāturvarṇyasamāśritāḥ<sup>135</sup> || 72 ||  
magās ca magagās<sup>136</sup> caiva mānasā<sup>137</sup> mandagās tathā |  
magā brāhmaṇabhūyiṣṭā magagāḥ<sup>138</sup> kṣatriyāḥ smṛtāḥ || 73 ||  
vaiśyās tu mānasā<sup>139</sup> jñeyāḥ sūdrās teṣāṃ tu mandagāḥ |  
na teṣāṃ saṃkaraḥ<sup>140</sup> kaścīd varṇāśramakṛtāḥ<sup>141</sup> kvacit || 74 ||<sup>142</sup>  
dharmasyāvvyabhicāritvād ekāntasukhitāḥ<sup>143</sup> prajāḥ |

<sup>133</sup> ジャンブー大陸は世界を構成する七つの大陸の一つ。インドの神話的な地理理解では中心に位置するジャンブー大陸を他の六つの大陸と七つの海が同心円状に取り囲んでいるとされた。BhaviṣyaPを含む大多数のプラーナは七つの大陸についてジャンブー (Jambū-)、プラクシャ (Plakṣa-)、シャールマリ (Śālmali-)、クシャ (Kuśa-)、クラウンチャ (Krauñca-)、シャーカ (Śāka-)、プシュカラ (Puṣkara-) をこの順番で挙げる (cf. Kirfel 1920 : 56ff.)。インド (バーラタ・ヴァルシャ) はこのジャンブー大陸に位置するとされる。

<sup>134</sup> シャーカ大陸については上記注を参照。

<sup>135</sup> cāturvarṇyasamāśritāḥ ] Stietencron; caturvarṇasamanvitāḥ: Nag, VePr 1896; cāturvarṇyasamāvṛtāḥ: Aufrecht

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>136</sup> magagās ] Nag, VePr 1896; maśakās: Stietencron; magasās: Aufrecht

Aufrecht の異読を magasa と記す Stietencron の注記は正確ではない。Stietencron の読み maśakās は MBh の並行箇所 (MBh VI, 12, 33) の読みに基づいている (注 142 参照)。

<sup>137</sup> mānasā ] Stietencron, Aufrecht; gānagā: Nag, VePr 1896; mānasāḥ: Nag and VePr 1896 Note

<sup>138</sup> magagāḥ ] Nag, VePr 1896; maśakāḥ: Stietencron; magasāḥ: Aufrecht

<sup>139</sup> mānasā ] Stietencron, Aufrecht; gānagā: Nag, VePr 1896

<sup>140</sup> saṃkaraḥ ] Stietencron, Nag, Aufrecht; śaṃkaraḥ: VePr 1896

VePr 1896 の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>141</sup> varṇāśramakṛtāḥ ] Stietencron; dharmāśrayakṛte: Nag, VePr 1896; dharmāśrayakṛtāḥ: Aufrecht

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>142</sup> BhaviṣyaP I, 139, 72-74 は SP 26, 29cd-31 との並行詩節である他、ViṣṇuP 等にも並行する記述が見出される (cf. Hazra 1958 : 41)。これらプラーナ文献の記述は MBh の以下からの引用と推測される。

MBh VI, 12, 33-35 : tatra puṇyā janapadās catvāro lokasaṃmatāḥ | magās ca maśakās caiva mānasā mandagās tathā || 33 || magā brāhmaṇabhūyiṣṭhāḥ svakarmaniratā nṛpa | maśakeṣu tu rājanyā dhārmikāḥ sarvakāmadāḥ || 34 || mānaseṣu mahārāja vaiśyāḥ karmopajīvināḥ | sarvakāmasamāyuktāḥ śūrā dharmārthaniścītāḥ | sūdrās tu mandage nityaṃ puruṣā dharmāśilīnāḥ || 35 ||

「そこには、世人に尊敬される四つの清浄な国士がある。すなわち、マガ、マシヤカ、マーナサ、マンダガである。王よ、マガには主として自己の仕事に専念するバラモンたちがいる。またマシヤカには、すべての願望をかなえる徳高い王族たちがいる。大王よ、マーナサには、それぞれの仕事で生活する実業者 (ヴァイシャ) たちがいる。彼らは一切の願望を満たされ、勇猛で、法 (ダルマ) と美利 (アルタ) に専念している。マンダガには、常に法を守るシュードラの人々がいる。」(上村 2002b : 53-54)

<sup>143</sup> dharmasyāvvyabhicāritvād ekāntasukhitāḥ ] Stietencron; dharmasyāsyā vicāro vā hy ekataḥ sukhīnāḥ: Nag; dharmasyāsyā vicāraṃ vā hy ekataḥ sukhīnāḥ: VePr 1896; dharmasyāvvyabhicāritvād ekāntasukhīnāḥ: Aufrecht

tejasas<sup>144</sup> te madīyasya<sup>145</sup> nirmītā viśvakarmanā || 75 ||

そこには、四つの種姓（ヴァルナ）に属する有徳の人々がいる。[すなわち] マガたちとマガガたち、マーナサたちとマンダガたちである<sup>146</sup>。マガたちはほとんどバラモンであり、マガガたちはクシャトリヤであると伝承されている。一方、ヴァイシャはマーナサたちであり、他方、彼らの内のシュードラはマンダガたちであると知られる。彼らには、四種姓（ヴァルナ）と四住期（アーシュラマ）における身分秩序の交雑はいかなるものであれ全く存在しない。法（ダルマ）からの逸脱が無いが故に、ひたすら幸福であるその人々は、私の輝きからヴィシュヴァカルマン神<sup>147</sup>によって作り出された。

tebhyo vedās tu<sup>148</sup> catvāraḥ sarahasyā mayoditāḥ<sup>149</sup> |

vedoktair vividhaiḥ stotraih parair guhyair mayā kṛtaiḥ || 76 ||

mām eva te ca dhyāyanti mām yajante ca<sup>150</sup> nityaśaḥ |

madbhāvanā madyajanā<sup>151</sup> madbhaktā matparāyaṇāḥ || 77 ||

mama śúśrūṣakāś caiva mama ca<sup>152</sup> vratacāriṇaḥ |

さて、彼らには、秘密の教え（ウパニシャッド）を伴う四つのヴェーダ聖典が、私によって告げられた。私によって作られ、ヴェーダ聖典によって語られた、様々な最高の秘密の賛歌によって、彼らは他ならぬ私だけを観想し、また常に私に対して祭式を行っている。彼らは、私のことを思い描き、私に対して祭式を行い、私のことを信愛し、私に

<sup>144</sup> tejasas ] Stietencron, Nag, VePr 1896; tejasā: Aufrecht

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>145</sup> madīyasya ] Stietencron, Nag, VePr 1896; madīyena: Aufrecht

Aufrecht の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>146</sup> いくつかの先行研究が、ここで言及されるシャーカ大陸の四種姓の名前を歴史上の民族に比定することを試みている。ここでは主要な比定の試みとして Scheftelowitz 1933 : 316-317、Hazra 1958 : 41、n.22、Prakash 1961 : 253-287、Humbach 2001 : 90 における比定先を以下に示す。

※略号 : Av. = Avestan / MP. = Middle Persian / OP. Old Persian / Skt. = Sanskrit

	Maśaka / Magaga	Mānasa	Mandaga
<b>Scheftelowitz 1933</b>	サカ語 (sakisch) の *masak “偉大な”	Skt. vaiśya のイラン語訳 māna-za “家に留まっている”	MP. bandag “使用人・奴隸”
<b>Hazra 1958</b>	マッサゲタイ (Massagetai)		
<b>Prakash 1961</b>	聖書のマゴグ (Magog)	聖書のゴグ (Gog) ※異読 gānaga に基づく	オリエントの Madā (=メディア人)
<b>Humbach 2001</b>	Av. mašiiāka “男・人間” OP. maθišta(ka) “指導者”	MP. mānbed “家の主人” (=Skt. grhapati)	OP. bandaka “使用人” MP. bandag

四種姓の一つ目 Maga については、いずれも一致してペルシアの宗教者マゴス (OP. magu; Av. moγu; MP. moy) に比定している。

<sup>147</sup> 神々の工匠神。太陽神との関わりについては注 61 を参照。

<sup>148</sup> vedās tu ] Nag, Aufrecht, VePr 1896; vedās ca: Stietencron;

<sup>149</sup> mayoditāḥ ] Nag, Aufrecht, VePr 1896; mayeritāḥ: Stietencron

<sup>150</sup> mām eva te ca dhyāyanti mām yajante ca] Stietencron; te ca dhyāyanti mām eva yajante mām ca: Nag; mām eva te 'bhidhyāyante japante mām ca: Aufrecht; mām eva te ca dhyāyante yajante mām ca: VePr 1896

<sup>151</sup> madbhāvanā madyajanā] Stietencron; manmānasā madyajanā : Nag, VePr 1896; manmanād yajanaparā: Aufrecht

<sup>152</sup> mama ca ] Nag, Aufrecht, VePr 1896; mamaiva: Stietencron

対して心身を捧げる者たちであり、私への奉仕者たちに他ならず、そして私への誓戒をよく果たす者たちである。

avyaṅgadhāriṇaś caiva<sup>153</sup> vidhidṛṣṭena karmaṇā || 78 ||  
 kurvanti te sadā bhadrām<sup>154</sup> mama pūjām mano'nugām<sup>155</sup> |  
 tathā<sup>156</sup> devāḥ sagandharvāḥ siddhāś ca saha cāraṇaiḥ |  
 viharante ramante ca dṛśyamānāś ca taiḥ saha || 79 ||

そして、彼らはアヴィヤンガ<sup>157</sup>を身に付けて、儀軌に則った儀礼行為でもって、常に私に対して、意に叶った喜ばしい礼拝（プージャー）を行っている。そして、ガンダルヴァたちを連れた神々やシッダたちが、チャーラナたち<sup>158</sup>と共に、愉快に過ごしたり、楽しんだりしており、彼ら（マガたち）と一緒にいるのが見出される。

jambūdīvīpe<sup>159</sup> tv ahaṃ viṣṇur vedavedāṅgapūjitah |  
 śakro 'haṃ śālmalīdvīpe<sup>160</sup> krauñcadīvīpe hy ahaṃ bhagaḥ<sup>161</sup> || 80 ||  
 plakṣadvīpe tv ahaṃ bhānuḥ śākadīvīpe divākaraḥ |  
 puṣkare ca smṛto brahmā tataś<sup>162</sup> cāhaṃ maheśvaraḥ || 81 ||

私はジャンブー大陸では、ヴェーダ聖典とその補助学によって尊崇されるヴィシュヌ神である一方、シャルマリー大陸では、私は力強いインドラ神（シャクラ）であり、クラウンチャ大陸では、私はバガ神である。他方、プラクシャ大陸では、私は光り輝く者（バーヌ）であり、シャーカ大陸では一日を作り出す者（ディヴァーカーラ）であり、そしてプシュカラ大陸ではブラフマー神であり、さらに私はシヴァ神（マヘーシュヴァラ）であると伝承される<sup>163</sup>。

tān magān mama pūjārthaṃ śākadīvīpād ihānaya |  
 āruhya gaṛudaṃ sām̐ba śīghraṃ gacchāvicārayan<sup>164</sup> || 82 ||

そのマガたちを、私への礼拝（プージャー）のためにシャーカ大陸からここへ連れて来

<sup>153</sup> -'dhāriṇaś caiva ] Nag, Aufrecht, VePr 1896; -'dhāriṇaḥ sarve: Stietencron

<sup>154</sup> bhadrām ] Nag; tatra: Stietencron; bhadrā: Aufrecht, bhadrām: VePr 1896

<sup>155</sup> mano'nugām ] Stietencron, Aufrecht; mamānugāḥ: Nag, VePr 1896

<sup>156</sup> tathā ] Nag, Aufrecht, VePr 1896; tatra: Stietencron;

<sup>157</sup> 原語 avyaṅga : マガたちが身に付けるとされる腰紐。BhaviṣyaPI. 117, 54cd-55ab では abhyaṅga という異綴形が現れ、その着用はマガの義務とされている。ゾロアスター教徒が着用を義務とする聖紐アイウイヨンハナ (Av. aiβiiāṅhana) に比定される。なお、この聖紐は今日ではクスティ (Kusti) という名で知られる。

<sup>158</sup> チャーラナは天界に住む種族の一つで、ガンダルヴァらと同様、天界の楽士として知られる。

<sup>159</sup> jambūdīvīpe ] Stietencron, Nag, VePr 1896; jambudīvīpe: Aufrecht

<sup>160</sup> śālmalīdvīpe ] Stietencron, Nag, VePr 1896; śālmalīdvīpe: Aufrecht

<sup>161</sup> bhagaḥ ] Stietencron, Nag, VePr 1896; śivaḥ: Nag and VePr 1896 Note

<sup>162</sup> tataś ] Stietencron, Nag, VePr 1896; tatra (?): Aufrecht

<sup>163</sup> ここで言及されるバーヌ（光り輝く者）、ディヴァーカーラ（一日を作り出す者）はいずれも太陽を意味する。また、バガ神はプラーナ文献において太陽と結び付けられる十二のアーディティヤ神群のうちの一人で、しばしば太陽神の意でも用いられる。なお、この文の Sām̐baP の並行箇所 (Sām̐baP 26, 37-38) では、挙げられている大陸の名前と対応する神格に違いがある。

<sup>164</sup> gacchā°- ] Stietencron; gatvā°-: Nag, VePr 1896

なさい。ガルダ鳥に乗って、躊躇うことなく、速やかに行きなさい、サーンバよ」

tatheti grhya tām ājñām<sup>165</sup> raver jāmbavatīsutah |  
punar dvāravatīm gatvā kāntyātīva samanvitaḥ<sup>166</sup> || 83 ||  
ākhyātavān pituḥ sarvaṃ svakīyaṃ devadarśanam |

tasmāc ca garuḍaṃ labdhvā yayau sāmbo 'dhiruhyā tam || 84 ||

以上のような<sup>167</sup>太陽神（ラヴィ）の命令を受けると、ジャーンバヴァティーの息子（サーンバ）は、この上ない美しさに満ちて、再びドヴァーラヴァティー<sup>168</sup>へ行き、自身が神とまみえたことをそっくり父（クリシュナ）に語ったのであった。そして、彼からガルダ鳥を受け取ると、サーンバはそれに乗って「シャーカ大陸へ」向かった。

śākadvīpam anuprāpya saṃprahr̥ṣṭatanūruhaḥ |  
tatrapāśyad yathoddiṣṭān sāmbar tejasvino magān || 85 ||  
vivasvantam pūjayato<sup>169</sup> dhūpagandhādibhiḥ<sup>170</sup> śubhaiḥ |  
so 'bhivādyā ca tān pūrvaṃ kṛtvāpy eṣāṃ pradakṣiṇām || 86 ||

pr̥ṣṭvā cānāmayam<sup>171</sup> teṣāṃ ślāghayāmāsa tāms tataḥ<sup>172</sup> |  
シャーカ大陸に到着すると、歓喜で体毛が逆立ったサーンバは、述べられた通りの輝かしいマガたちが、心地よいお香（ドゥーバ）や香木（ガンダ）などによって太陽神（ヴィヴァスヴァット）に対して礼拝（プージャー）を行っているのを、そこで目にした。そして、彼はまず最初に彼らに恭しく挨拶し、彼らに右繞<sup>173</sup>も行い、そして彼らの息災を尋ねてから、彼らのことを称えた。

yūyam hi puṇyakarmāṇo draṣṭavyāś ca śubhārthibhiḥ<sup>174</sup> |  
ratā ye<sup>175</sup> 'rkasya pūjāyām yeṣāṃ caiva varapradah || 87 ||  
tanayam vitta māṃ viṣṇoḥ sāmbar nāmnā ca viśrutam |  
candrabhāgātate cāpi mayā sūryo niveśitaḥ || 88 ||  
tenāhaṃ preṣitaś cātra uttiṣṭhadhvaṃ vrajāmahe |

「貴方がたは、幸福を望む者たちによって、行い正しき方々であり、太陽神（アルカ）への礼拝（プージャー）に喜んで専心する者たちであると、そして、太陽神が貴方がた

<sup>165</sup> grhya tām ājñām ] Nag, VePr 1896; pratigrhyājñām: Stietencron;

<sup>166</sup> samanvitaḥ ] Nag, VePr 1896; samāvṛtaḥ: Stietencron;

<sup>167</sup> 永井 2021a : 78 における並行箇所 SāmbarP 26, 40 の誤訳を改める。

<sup>168</sup> クリシュナが住む都の名前。

<sup>169</sup> pūjayato ] Stietencron; pūjayanto: Nag, VePr 1896

<sup>170</sup> dhūpagandhādi° - ] Stietencron; dhūpadīpādi° - : Nag, VePr 1896

<sup>171</sup> pr̥ṣṭvā cānāmayam ] Nag, VePr 1896; pr̥ṣṭvātho 'nāmayam: Stietencron

<sup>172</sup> ślāghayāmāsa tāms tataḥ ] Stietencron; praśamsāsāma pūrvakam: Nag, VePr 1896

<sup>173</sup> 敬意を払う相手を中心として、その周囲を右回りする表敬行為。

<sup>174</sup> draṣṭavyāś ca śubhārthibhiḥ ] Stietencron; draṣṭavyārthe śubhārthinaḥ: Nag; draṣṭavyārthe śubhārthinā: VePr 1896

<sup>175</sup> ratā ye ] Stietencron, Nag; ye ratā: VePr 1896

VePr 1896 の異読について Stietencron の注記はない。

の望みの叶え手であると考えられております。ヴィシュヌ神の息子で、サーンバという名前で知られる私のことを、お見知りおきください。さらにまた、この私によってチャンドラバーガー河の岸边に、太陽神 [の像] を置き定められました。そして、彼 (太陽神) が私をここに遣わしました。どうか立ち上がってください。さあ、行きましょう」

te tam ūcus tataḥ sām̐bam evam etan na saṁśayaḥ || 89 ||

asmākam api devena vyākhyātam pūrvam eva hi |

aṣṭādaśakulānīha magānām vedavādinām |

yāsanti ye tvayā sārḍham yathā devena bhāṣitam<sup>176</sup> || 90 ||

すると、彼らはサーンバに言った。「確かにその通りである。これは疑いない。なぜなら、我々にも神はかつて [同じことを] お語りになったのだから。ここには、ヴェーダ聖典に精通するマガたちの、十八の氏族 (クラ) がいる。彼らは、神がお話しになった通り、貴方と一緒にいくつもりである」

tatas tāni daśāṣṭau ca kulānīha samantataḥ |

āropya garuḍe<sup>177</sup> sām̐bas tvaritaḥ punar abhyagāt || 91 ||

(sa putradārasaṁyukto pūjāyajñāya cāgataḥ |<sup>178</sup>)

so 'lpenaiva tu kālena prāpto mitravanaṁ tataḥ<sup>179</sup> |

kṛtvājñāṁ tu<sup>180</sup> raveḥ sām̐baḥ kṛtsnaṁ tv evam<sup>181</sup> nyavedayat || 92 ||

それから、ここにいる、それらの十八の氏族を全てガルダ鳥に乗せると、サーンバは再び速やかに [ジャンプ大陸へ] 向かって行った。そして、彼は子供や妻たちと一緒に、礼拝と祭式のために戻って来た。さて、彼は僅かな時間でそこからミトラヴァナ<sup>182</sup>に到着した。太陽神 (ラヴィ) の命令を果たした後、サーンバは事の全てを、その通りに [太陽神に] 報告した。

raviḥ śobhanam ity uktvā prasannaḥ sām̐bam abravīt |

mama pūjākārā hy ete prajānām śāntikārakāḥ || 93 ||

mama pūjām kariṣyanti vidhānoktām yadūttama<sup>183</sup> |

<sup>176</sup> yathā devena bhāṣitam ] Nag, VePr 1896; yatra saṁnihito raviḥ: Stietencron

<sup>177</sup> garuḍe ] Stietencron, Nag; garuḍam: VePr 1896

VePr 1896 の異読について Stietencron の注記はない。

<sup>178</sup> sa putradārasaṁyukto pūjāyajñāya cāgataḥ ] Stietencron; om. : Nag, VePr 1896

この ab 句は Nag 等の刊本には見えない。Stietencron に従い Sām̐baP 26 の並行箇所から補う。

<sup>179</sup> tataḥ ] Nag, VePr 1896; punaḥ: Stietencron

<sup>180</sup> tu ] Nag, VePr 1896; tām: Stietencron

<sup>181</sup> sām̐baḥ kṛtsnaṁ tv evam ] Nag, VePr 1896; sām̐bo yat kṛtam tan: Stietencron

<sup>182</sup> 太陽神が住するとされる聖地で、ミトラ神 (mitra) の森 (vana) の意。先行研究はしばしば今日のパキスタンのムルターン市に比定している。BhaviṣyaP I, 72, 4-5 によればこのミトラヴァナとムンディーラ (Muṇḍīra)、カーラプリア (Kālapriya) の三つが太陽神の著名な聖地であるという。

サーンバ伝説においてサーンバはこの地で太陽神に秘密の賛歌を捧げることで、太陽神と出会い、自身にかけられた呪いから解放され (Sām̐baP 24, 5ff. = BhaviṣyaP I, 127, 6ff.)、またその後、そこに寺院を建設し、自身が見つけた太陽神象を安置したとされる (Sām̐baP 26, 1-5 = BhaviṣyaP I, 129, 1-8)。

<sup>183</sup> kariṣyanti vidhānoktām yadūttama ] Nag, VePr 1896; vidhānoktām kariṣyanti mano'nugām: Stietencron



tatkrte na punaś cintā tava kācid bhaviṣyati || 94 ||

太陽神は「それは素晴らしい」と言った後、満足しながらサーンバに言った。「なぜなら、私に対する礼拝（プージャー）をなし、人々に繁栄をもたらすこの者たちは、私に対して、儀軌に則った礼拝（プージャー）を行うであろうから。[礼拝が] 彼らによって行われるのであれば、いかなる思い悩みも二度とお前に生じることはないだろう。ヤーダヴァ族の最優なる者よ」

iti śrībhaviṣye mahāpurāṇe brāhme parvaṇi saptamīkalpe sāmboṣṭhāyāne bhojakānayanam nāmaikona-catvāriṃśa-duttara-śatataṃ dhyāyaḥ || 139 ||

以上が、吉祥なる『バヴィシユヤ・マハープラナーナ』のブラーフマの巻におけるサブタミー・カルパ<sup>184</sup>に関する、サーンバの物語の「ボージャカの招来」という名前の第139番目の章である（第139章結）

### 【参考文献】

#### 一次資料

- Aufrecht, Theodor. 1859. *Catalogus Codicum Manuscriptorum Sanscriticorum Postvedicorum; quotquot in Bibliotheca Bodleiana adservantur*. Part1. Oxonii: E Typographeo Academico.
- Olivelle, Patrick, ed. and trans. 2005. *Manu's Code of Law: A Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmaśāstra*. New York: Oxford University Press.
- Pathak, M. M., ed. 1997. *The Critical Edition of the Viṣṇupurāṇam*, Vol.1. Vadodara: Oriental Institute.
- Śarma, Rājendra-Nātha and Siṃha, Nāga-Śaraṇa, ed. 1984. *Śrībhaviṣyamahāpurāṇam*, Vol.1. Delhi: Nag Publishers.
- Śrīkṛṣṇadāsa, Kṣemarāja, ed. 1896 (1st Ed.); 1959 (3rd Ed.). *Bhaviṣyamahāpurāṇa*, Vol.1. Bombay: Venkateśvara Press.
- Srivastava, V. C., ed. and trans. 2013. *Sāmbo-Purāṇa: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation, Notes & Index of Verses*. Delhi: Parimal Publications.
- Stietencron, Heinrich von. 1966. *Indische Sonnenpriester: Sāmbo und die Śākadvīpīya-Brāhmaṇa: Eine textkritische und religionsgeschichtliche Studie zum indischen Sonnenkult*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Sukthankar, V. S., ed. 1942. *The Mahābhārata vol.4 Āraṇyakaparvan Pt.2*. Poona: Bhandarkar Institute Press.
- Sukthankar, V. S. and Belvalkar, S. K., ed. 1947. *The Mahābhārata vol.7 Bhīṣmaparvan*. Poona: Bhandarkar Institute Press.

<sup>184</sup> サブタミー（第七番目）とは、インド太陰暦の白半月（新月から満月までの半月（盈月））と黒半月（満月から新月まで（虧月））における第七日のこと。太陽神はとくにこの日を愛好するとされるため、インドの太陽神の祭りの多くは伝統的に（白半月の）第七日に祝われる。BhaviṣyaPIではこの第七日に行われる様々な祝祭やその儀軌（カルパ kalpa）の説明が中心的話題となっている。

Sukthankar, V. S. and Belvalkar, S. K., ed. 1961. *The Mahābhārata vol.13 Śāntiparvan Pt.1*. Poona: Bhandarkar Institute Press.

Sukthankar, V. S. and Belvalkar, S. K., ed. 1966. *The Mahābhārata vol.17 Anuśāsanaparvan*. Poona: Bhandarkar Institute Press.

## 二次文献

Böthlingk, Otto von and Roth, Rudolph, ed. 1879-1889. *Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung*. St. Petersburg: Buchdruckerei der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften.

Das, Bhumiapati, trans. and Dāsa, Pūrṇaprajña, ed. 2014. *Bhaviṣya Purāna*, Vol.4 (Chapters 117-150). Vrindaban: Rasbihari Lal & Sons.

Hazra, Rajendra. Chandra. 1958. *Studies in the Upapurānas*. Vol. I: *Saura and Vaiṣṇava Upapurānas*. Calcutta Sanskrit College Research Series, No. 11. Calcutta: Sanskrit College.

Hodivala, Shapurji Kavasi, 1920. *Parsis of Ancient India*. Dorab Saklatwalla Memorial Series, No. II. Bombay: Sanj Vartaman Press.

Humbach, Helmut. 1969. "Review: *Indische Sonnenpriester. Sāmba und die Śākadvīpīya-Brāhmaṇa. Eine textkritische und religionsgeschichtliche Studie zum indischen Sonnenkult* (=Schriftenreihe des Südasien-Instituts der Universität Heidelberg. Bd. 3) by Heinrich von Stietencron, Hermann Berger." In *Indo-Iranian Journal*, Vol.12(1), pp.43-47. The Hauge: Mouton.

Humbach, Helmut. 1978. "Miθra in India and the Hinduized Magi." In *Études Mithriaques: actes du 2e congrès international Téhéran, du 1er au 8 septembre 1975*, pp.229-253. Téhéran: Bibliothèque Pahlavi; Leiden: Diffusion, E. J. Brill.

Humbach, Helmut. 2001. "Sāmba and the Hinduized Magi: Fiction or History?" In *Third International Congress Proceedings : 6th to 9th January 2000*, pp.88-94. Mumbai: K.R. Cama Oriental Institute.

Kirfel, Willibald. 1920. *Die Kosmographie der Inder: nach den Quellen dargestellt*. Bonn; Leipzig: Kurt Schroeder.

Monier-Williams, M., ed. 1899. *A Sanskrit-English Dictionary, etymologically and philologically arranged with special reference to cognate Indo-European languages*. Oxford: Clarendon Press.

Nagar, Shanti Lal, trans. and Shukla, Ashok Kumar, ed. 2021. *Bhaviṣya-Mahāpurāna: An Introduction, Sanskrit Text, English Translation, Notes & Index of Verses*, Vol.1. Delhi: Parimal Publications.

Oberlies, Thomas. 2003. *A Grammar of Epic Sanskrit*. Berlin; New York: Walter de Gruyter.

Prakash, Buddha. 1961. "Studies in Purānic Geography and Ethnography Śākadvīpa." In *Purāna*, Vol. III (2), pp.253-287. Varanasi: All-India Kashiraj Trust.

Rocher, Ludo. 1986. *The Purānas. A history of Indian literature*, Vol. II, fasc. 3. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Scheftelowitz, Isidor. 1933. "Die Mithra-Religion der Indoskythen und ihre Beziehung zum Saura- und Mithras-Kult." In *Acta Orientalia*, Vol.11, pp.293-333. Leiden: E. J. Brill.

- Whitney, William Dwight. 1896 (3rd Ed.). *A Sanskrit Grammar, Including Both the Classical Language, and the Older Dialects, of Veda and Brahmana*. Leipzig: Breitkopf & Härtel; Boston: Ginn & Company.
- 青木健 2019『新ゾロアスター教史—古代中央アジアのアーリア人・中世ペルシアの申請帝国・現代インドの神官財閥—』刀水書房.
- 岡田明憲 1988『ゾロアスター教の神秘思想』講談社現代新書 888, 講談社.
- 上村勝彦訳 1992『バガヴァッド・ギーター』岩波文庫, 岩波書店.
- 上村勝彦訳 2002a『原典訳 マハーバーラタ 4』ちくま学芸文庫, 筑摩書房.
- 上村勝彦訳 2002b『原典訳 マハーバーラタ 6』ちくま学芸文庫, 筑摩書房.
- 阪本(後藤)純子 2015『生命エネルギー循環の思想—「輪廻と業」理論の起源と形成』龍谷大学現代インド研究センター.
- 永井悠斗 2019「インド文献に現れる宗教者「マガ」—先行研究と関連文献の整理—」『宗教学・比較思想学論集』20: pp.39-58, 筑波大学宗教学・比較思想学研究会.
- 永井悠斗 2020「サーンバ伝説の和訳および解説 (1) —『サーンバ・プラーナ』第3章および第6章—」『宗教学・比較思想学論集』21: pp.1-20, 筑波大学宗教学・比較思想学研究会.
- 永井悠斗 2021a「サーンバ伝説の和訳 (2) —『サーンバ・プラーナ』第24章および第26章—」『宗教学・比較思想学論集』22: pp.65-80, 筑波大学宗教学・比較思想学研究会.
- 永井悠斗 2021b「マガ・ブラーフマナとデーヴァラカーその共通性と相違点について—」『印度学仏教学研究』70(1): pp.501-504, 日本印度学仏教学会.
- 藤原達也 2002「インド・イランの太陽神」松村一男・渡辺和子編『太陽神の研究 上巻』: pp.49-99, リトン.
- 鎧淳改訂・註 1995『J. ゴンダ: サンスクリット叙事詩・プラーナ読本』法蔵館.
- 渡瀬信之訳注 2013『マヌ法典』東洋文庫, 平凡社.

(ながい・ゆうと 筑波大学人文社会科学研究科 哲学・思想専攻)

※本稿は、JSPS 科研費 20J10840 の助成を受けたものである。